

○西晉 魏の臣司馬炎、魏の元帝に逼りて位を己れに禪らしむ、之を
東晋の末、劉裕晋祚を篡して宋を起し、北方にては拓跋魏五胡十六國を滅して保
有し、兩主各々至尊と稱して下らす、之れり以後、隋の天下を統一するまでの間

○南北朝 洛陽の北
魏 拓跋氏の後裔珪なる者、諸部に推
されて代王となり國號を魏と稱す

○奕世 累に同じ
○邙山 洛陽の北

故に北邙
○白楊 名
○龍門 一名河津。禹が河

水を開鑿せし所
○關 一方の柱に

○驪山 名
○彫欄 名
○離々 草木の茂

○澗水 西安府の
北を流る

○隴蜀 隴蜀の嶺
○終南山 南山ともいふ。
鎬京の南に在り

○殺函 殺函の函
○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○未央 長樂 共に漢代の
故宮の名

○華 蜀道
○婁敬 高祖に見え郎中に拜せらる

○大毛山 大毛島に在り、一
に扇山ともいふ

○土佐泊 其名早く土佐日記に見ゆ。
今鳴門村の大字となる

○徂徠 大寶積經に「こ
の地の厚さ百六

十万由旬ありて、その最下底を金輪際といふ
さあり。即ち底の又底を究意する所の意なり

○金輪際 大寶積經に「こ
の地の厚さ百六

十万由旬ありて、その最下底を金輪際といふ
さあり。即ち底の又底を究意する所の意なり

○鐵にして玻璃 光澤を有す

○縈回 縈はまはる

○咫尺 咫は八寸、
尺は十寸

○怪潮 潮はあやしげな
るうしほ

○湛然 水のたゞへ

○碧落 碧はそらを
いふ

○簇々 簇はむらむら
と

○粉壁 粉はしら
かべ

○金泥畫 金泥にて畫けるもの。金泥は金箔を粉
にして膠の水に溶したるものをいふ

○織月 織はほそ
き月

○海若 海の
神

○霏微 霏は雨
の降

○亂鳧 鳧は鴨の類、波の躍るを亂
れ飛ぶ鳧に喩へたるなり

○狼雨 狼は亂る也。擾
れ降りしきる雨

○霏微 霏は雨
の降

○素車 素は装飾
なき

○依稀 依稀といふに同じ。
ホシヤリしたる貌

○福良浦 淡路國三原
郡に在り

○運塚 塚は
か

○麗水 麗は
水

○一四 鳴門

車。こゝは白旗を擧ぐるに等しく降参の意を表するなり

○家廊 空荘にして洪大なること。即ち大空にいふ語なり

一五 名勝の保存

○封内 領 歌枕なる地名。名所

○靈區 神社佛閣のある地

○風教 習風

上のを ○明媚 景色のうるはしきこと

○紫銅 カラカ子

○土功 土地に關する工事

○董

す ○銘す けりつ

○偉圖 大なるもくるみ

○原ねて

○古刹 舊祠

寺や ○燼滅 けりつ

○故意 こと更に或行爲をなさんとする意思

○涵養 物の水にしみる如く次第次第にやしなふこと

第一にやしなふこと

一六 山中鹿之助の畫像に題す

大町 桂 月

○山中鹿之助 名は幸盛、尼子氏の臣

○金城湯池 城池の堅固なるをいふ。城堅きこと金城熱すること湯の如しとの意

○楚囚 その監視の下に徹々たる生活をなせるをいふ

○滿腔 つばい

○切齒

扼腕 齒をくひりばり、腕をさすること。憤慨するさま

○大厦の云々 國家の滅びんことを大變にあひては、微弱の勢を以て回復しが

轉じて國家の義をす ○鞠躬 身をかがめて敬ふをいふ

○社稷 社は土地の神、稷は五穀の神。國を保つものは是等の神を祭るより

○俠骨 稜々 盛んなるさま

○懦夫 卑怯者

○欽慕 したふこと

○飯梨川 出雲國能義郡に在り

一七 狩野芳崖

○斯道 その 府中藩を稱す。○豐浦藩 毛利氏の分藩

○同門の獅子王 獅子は百獸の王と稱せらるる故

汽車汽船、電信其他の器械的物事

○準繩 繩はスミナハにて直をばかるもの

○物質的文化

之の爲めに利用厚生の道の開くること

○繪卷物 繪に詞書を添へて記したる卷物

○執

金剛神 佛教に佛法を
守護する神

○目下の急務 急なるつとめ

○書を裁す 書を

○丹青 画のこゝろをいふ

○滔々 勢盛んな

○絶筆 死する前にか

○指導 をしへみ

一八 ダーウソンの勤勉

○非凡 なみなら

○機智 よく活動する

○穎才 すぐれ

○抛棄 うちす

○賦與 与へる

○寸隙 のひま

○間斷 断つ

○遵守 ひ守る

○徇 せう

○賦與 与へる

○一面識 一度あひ

○散策 散歩に

○少憩 少しやす

○晩 ばん

○通宵 ほし

○散策 散歩に

○少憩 少しやす

○晩 ばん

○反復 すこゝ

○當面 面前に存在

○異日 日他

○羸弱 るんじやく

○通宵 ほし

○散策 散歩に

○少憩 少しやす

○晩 ばん

○反復 すこゝ

○當面 面前に存在

○異日 日他

○羸弱 るんじやく

○反復 すこゝ

○當面 面前に存在

○異日 日他

○羸弱 るんじやく

○反復 すこゝ

○當面 面前に存在

○異日 日他

○羸弱 るんじやく

一九 專一なれ

○たつさ 便宜

○導師 佛葬にて儀式の主

○桃尻 馬に乗つて、腰

○檀那 梵語。施主をいふ。今僧より施主を指して

○早歌 今の小

○檀那 檀主といひ、又施主より僧を檀那といふ

○早歌 今の小

○あら

二〇 物の上手

○能をつかんとする人 技能を自分の身に付けんとする人の意にて一藝一技に堪

○堅固かたはなる 堅固さは和

○つれなく しぶさく人にもか

○心にくからめ 奥ゆかし

○堅固かたはなる 堅固さは和

○つれなく しぶさく人にもか

○心にくからめ 奥ゆかし

○つれなく しぶさく人にもか

○つれなく しぶさく人にもか

かよひ

○享有 もの

○偉績 すぐれて大な

徒然草

一九 專一なれ

○たつさ 便宜

○導師 佛葬にて儀式の主

○桃尻 馬に乗つて、腰

○檀那 梵語。施主をいふ。今僧より施主を指して

○早歌 今の小

○檀那 檀主といひ、又施主より僧を檀那といふ

○早歌 今の小

○あら

二〇 物の上手

○能をつかんとする人 技能を自分の身に付けんとする人の意にて一藝一技に堪

○堅固かたはなる 堅固さは和

○つれなく しぶさく人にもか

○心にくからめ 奥ゆかし

○堅固かたはなる 堅固さは和

○つれなく しぶさく人にもか

○心にくからめ 奥ゆかし

○つれなく しぶさく人にもか

○つれなく しぶさく人にもか

○その骨なけれども 天性無器用 たりとも
 ○不堪のさこえ 上手ならず さいふ風聞
 ○無下の瓊瑾 極めてつまらぬ過失 瑣も瑕もさ美玉の
 謂なりしを、瑕の一義なる疵 瑕の義に轉用するに至れり
 ○世の博士 世間のものしり

二一 鼎かづさ

徒然草

○仁和寺 山城國葛野郡花園村字御室にあり。眞言宗なり

○足鼎 今、手ざりさ いふ物なり

○大方ぬかれ 大方の用意今違へ

○がりに許 危く捨てんさしたる命を辛らさ命まうけて ぶじて拾ひ得ての義なり

○かけうげながら 缺け穿れ

○か

○小徑 ちこみ 一泓 泓は水の清きさま

○健鯉 丈夫なる鯉

○水榭 水濱に構へたる榭

二二 小品四則

大町桂月

○巨蟹 がおほ

○蟿み ばさ

○薄名 草の

○人籟 人の

○蟿 ばさ

○四面

○巨蟹 がおほ

○蟿み ばさ

○薄名 草の

○人籟 人の

○蟿 ばさ

○四面

二三 初対面

長田偶得

○書院 齋書 咳聲 せきは

○燭淚堆を成す 昔のあかしのさぼれること。時間の経過甚しきをいふ

○曲者 きのもの

○更漸く閑なり 夜のふけたるをいふ。更 一夜を五分したる稱

○曲者 きのもの

○爛とし

○硝薬 すり

○轟然 音の形容

○籠ぼん

○蠕動 ころも

○好下物 かな

○痛飲 甚しく酒を

二四 御わびの事ども

○尊宅 人の住家を尊びていふ語

○宵時雨 夜ふる時雨。時雨は秋の終より 冬の初めにかけてふる雨なり

○由緒

いはれあ
ること
○言語道斷 言葉にてのべいふ
ことが出来ぬ意

○不覺 根性の淺は
かなること

○名工 名高き
職人

○洛中 京都
中

二五 良友

○芝蘭 香ひよ
き草

○鮑魚之肆 子魚の市
または店

○九條殿 又、坊城
殿と稱す

○薰蕕

薰は香草、
蕕は臭草

○芝澗 芝草の生
ひたる谷

○四人の翁 支那秦時代漢の人。東園公、夏黄
公、角里先生、綺里季をいふ。此

四人は秦の難を避けて商洛山山中に隠れたりしが、後漢の孝惠帝の
太子たり時出でて仕へたり。老年にして鬚眉皓白なるより四皓といふ
向秀、劉玲、子咸、山
濤、王戎の七人をいふ

○し、びしほ 醢、即ち
肉醬なり

居は住ひなり。初め墓地近くに住み、次に
市に出で、更に學宮の傍に移れるをいふ

○軸 卷さいふ
に同じ

○金玉聲 賞す
る心

○龍門 地名。一に河津といふ、馬か河水
を閉鑿せしところ。元稹の墓あり

○後三條院 院は院に居給へる上
皇若くは法皇をいふ

○東宮 皇太子を云ふ。支那にて太子の居所が皇居の東に在りしよりいふ。東は春と義
相通するより、春宮と書き、共にハルノミヤ又はトウカグリと讀む習ひにて、同
意味なりしが、今は御身上を東宮と
し。御座所を春宮とする習ひなれり

○學士 東宮の職名。經を執つ
て奉説する事を掌る

○實政 藤原實政也。日野
式部大輔資業の子

任國に赴く 甲斐の國守を
りて赴任する

二六 友千鳥

○友千鳥 群れ居る千鳥をいふ。冬月多く河海の上に群りて
鳴く。友情切なるを以て、古來多く和歌に讀まる

○しばなく しば

○わたつみ 海を領する物。即ち海神をいへりし
後には轉じて單に海にもいふ

二七 馬琴日記鈔序

○大人 官位を有
する人

○匹夫 身かひくき
ただの人

○起居注 日常のたちね
をしるすこと

○ダイ

ヤリー Diary 日記

○蒐集 蒐りあつめること

○周密 ことごとく

○甜美 味よきこと

二八 藏書印

○しみ 紙魚。本をくふ虫

二九 上杉謙信

○迅雷 ばげしきかみなり

○神出鬼没 鬼神の如く、出没自在、端睨すべからざること

○天真爛漫 つかみかざりなく、心の儘の言動にあらはるること

○汗牛充棟 蔵書の多きをいふ。柳子厚の陸水通墓表にて「昔爲書、處則充棟宇、出則汗牛馬。」あり

○周密 ことごとく

○響庭 響庭菴村。現代の老小説家なり

○一樹 一つの肉のきれ

落合直文

○執をととむ 心をさりこむること

○わかず わからず。知れざるをいふ

○戡定 戡はこるすなり

○體現 形象をなして

外形に現はるること

○氣腫 身に腺病質によりて生ずるもの。瘡の類

○胸服 今の羽織の事なり

○陣笠 軍陣の一種

○感状 一に感書といふ。武門に勳功あるものに與ふる賞状。後世には軍功あるものゝみに與ふ

○九月十三夜 八月十五夜と共に觀月の良辰なり。後の月、今日の日、二夜の月、幸名月、粟名月等の稱あり

○數行行 二三

○三更 今の午時に當る。更は昔時一夜を五つに分くる

○三更 後十二時。初更は午後八時五更は午前四時なり

○越山 越中の地

○能州 能登

○魚

三〇 旅順追懷

○荒涼 荒れはてす

○劫餘 戦争後の光景をいふ

○廢墟 昔は其處に物ありて今は廢れたる地なり

○狼藉 紛亂の意。狼草を藉きて臥せば、其跡亂る。故に亂るゝ様にいふ

○那邊 どのあ

○結 結びがたき夢。がては爲し難きの意。接尾語にて、常に動詞の下に付く

○突貫 今兵語の突撃の意なり。侵襲喇叭を

吹奏し、敵陣に向ひ銃
 剣突入するをいふなり
 ○敵愾 敵に對する
 ○呪詛 呪ふことば
 ○塹壕 堀
 分つて散兵壕。掩
 壕、交通壕等とす
 ○坑道 地下に開削したる隧道にして、要塞戦に
 障碍物の一種。杭又は天然の樹桿を支點として、諸方向に
 鐵線を張りたるもの、刺を附し又は電流を通ずることあり
 ○俯仰低回 あたり
 はし、たちも
 さまほること

三一 壕のうち

森 鷗 外

○なごめる 和らぐ
 ○たもとほり 徘徊し
 ○問ひけらく 問ひける
 の意

○袖ひづち 袖の濕る
 ○道をなみ 道なき故に。道
 なきによりて
 ○糶 せしむ
 ○頭たゆ かしら

げに 頭だる
 ○辭まば 無禮な
 りの意
 ○今ゆのちり後 今よ

三二 ロンドン市政

井 上 友 一

○市政 市の行政
 ○着實 親切なること
 ○忠誠 つかすこと
 ○神髓 眞正の
 意味

○卓絶 たちま
 ○熱鬧 人のこみあひて
 ○羅旬語 古代羅馬人の使用せし
 語。今日に科學の術語
 として多く
 用ひらる

○貢獻 力を致
 ○推薦 おしあげ
 ○貴賓 高貴な
 る客

三三 琉球人

○僻在す へきざい
 へきで在る
 ○隔絶 かけへだ
 たること
 ○酷似 よく似よ
 うこと

○語彙 語のあ
 つまり
 ○記紀 記は古事記、紀は
 日本書紀の略稱
 ○土俗 土地の
 風俗

○禁厭 ないまじ
 ざること。原因な
 くして然ること
 ○開關 世の開け
 ○傳説 いたひつたへ
 ○偶然 思ひ
 よら

○習俗 習慣
 風俗

訂補 新體國語教本詳解 卷七 終

訂補 新體國語教本詳解 卷八

一 韓國併合詔書

- 保障 人民を保護するをいふ。租税を軽くして、
- 協定 協議して決
- 杜絶 断つこと
- 銳意 心をほげまし
- 禍亂 みだれ
- 民衆の民
- 瞭然 分明にして
- 優遇 れんごろな
- 綏撫 静かにして安
- 康福
- 鞏固 たしかな
- 總轄 統べる
- 賴ラシム

二 韓國の併合

- 曾戸茂梨
- 櫟樟 櫟は樟(くす)のき)に同じ
- 有史時代 歴史上にあら
- 政

治的関係 國家の主權者が其職權に

○對韓策 韓國に對する政策

○經營 度りいなむ

○廢絶 つる

○委棄 打す

○逆襲 おし

○壯圖 壯大なる企て

○震

○弱處 よほき點

○起因 る

○極東 東の

○國際 國家と國家との

○讓與 讓り渡す

○積衰 弱せること

○補綴 つづる

○統治權 國家を統治する權力

○必然 るべきこと

○約

○象徴化す 其物自身が説明を要せずして、直接に或る意義を發揮すること

○因果又 是緣

○象徴化す 其物自身が説明を要せずして、直接に或る意義を發揮すること

三 國語と國家

上 田 萬 年

○神別、皇別、蕃別 神祇の裔を神別。天皇の裔を皇別。外國人の族を蕃別といふ

○鎔化 つになる

○慶

○一朝事ある秋 一度戰爭の起りたるとき

○化身 かけり

○文人國

學問のすぐれたる國

○慶報 しらせ

○八千代をことほぎ

○標

識し

○國民的思考力 國民全體の考へ

○終日 中

○頑是なし 小兒の理

非をわきまへざることをいふ

○階級 社會上の地位

○反映す へす

○恩澤 げ

四 本居宣長

○伊勢の津 一に安濃津といふ。三重縣廳あり

○山田 外宮のある處。内宮宇治郷と合併して、宇治山田町と稱す

○泰

斗 泰山北斗の略語。泰山北斗を仰ぐが如く學者を尊崇する謂、轉じて大家の義とす

○兀坐 物寂しくツクキント靜かに坐すること

○さ

やさや 鈴のふれあひて鳴る音

○賈人 商賣

○滔々 水の流れて返へらざる義にて、人皆社會の風潮に従ふて敢へて一人

の抗するものなきをいふ

○孟浪杜撰 孟浪は精要ならざる。杜撰は撰述の錯誤

○阿闍梨 梵語 Acarya 軌範師の義。轉じて僧の官名

○穿鑿

穴のなき所へ穴を明けるをいふ。されど、こはさびしむむにて、詮議するなどの意。○帷を垂れ 師となりて教授すること。○冠辭

考 古事記、日本紀、萬葉集等に見えたる枕詞を解釋せるもの。○千歳の意 永久。○また 二度。○名刺を

云々 古は師と仰ぐ人には必ず姓名を書して奉りたり。○舞文曲筆 文はもと刑法の文を弄びて罪に致す

をいひ。曲筆は事實を曲げて巧に書きあらはすをいへり。○日暮れて途遠し 老いて期する所の前途尙遠なるをいふ。○春

秋に富む 年少き。○經營 度りなす。○慘澹 又慘憺とも書く、心を碎き思をなやますこと。○編

帙 冊子な。○浩瀚 廣大なるさま。○星霜 年月を。○八犬傳 南總里見八犬傳の略稱

○斯道 學問などの意。○闡明 開發して明かす。○紙魚の如き學者 魚を食む如き學者の意。○反駁 駁

論 正し、是非を論ずるをいふ。○科學的態度 科學の態度の秩序なき想像又は獨斷の意見などを論ずるをいふ。

見識なき學者を嘲りていふ直喩。○演繹 既知の原理を基礎として現象の事實に論及すること。○反駁 駁

論 正し、是非を論ずるをいふ。○科學的態度 科學の態度の秩序なき想像又は獨斷の意見などを論ずるをいふ。

立て秩序よく論及するさま。○公卿 攝政、關白、太政大臣、左大臣、右大臣、内大臣は公。大納言にも四位以上は卿なり。○堂 上家 部殿上人の總稱、公家さいふに同じ。○地下 堂上の對、上殿を許されざる人。

五 伊藤仁齋

○偃武 武器を藏めて用ひざる義。兵亂やみて世の治平になりしことをいふ。○模擬踏襲 模擬は他物になぞらへ似つぐこと。踏襲は他物の

後を承けつぐこと。○後藤良山 名醫なり、名は達字は有成。左。○井原西鶴 大阪の

人にして浮世草紙の作者。通稱平大夫。○近松門左衛門 有名なる戯曲家。姓は松壽軒、西鶴、鶴水二万翁の號あり。○維楨 名は維貞。

平馬、平安堂、巢林子、不移山人と號す。○輩出 後を追ひて續出づること。○源佐

○園城寺 天臺宗寺門派の本山、三井寺ともいふ。江州大津の西北三井にあり。○神禹功 夏の禹王が治水の功をいふ。○朱

子の學 南宋朱熹の始る所。凡孟に基つき理を窮め知を致し躬に反りて實を踐むを主とす。 ○禪意 禪學の意義。禪は

靜慮又は定と譯す。禪は教外別傳不立文字とて、所依の經典なく、禪定を修して心性を悟得するを宗義とす。その宗義の學修を禪學とす。 ○王學 明の

學。格致はこれを心に反求すべく、事物に求むべからざるの理を悟れり。この學派は専ら良知を致すを主とす。 ○寤寐 めてもさ ○軒

昂 高くあがるさま ○堀河の居 今なほ京都市堀河通中立賣下ル東側にあり ○鷄群の孤鶴 衆多の

交はる賢者 漢書賈誼傳の註に「若下涉者」あり ○陳根 き根 ○萬鍾 六斛

又は十斛を鍾といふ ○疾言遽色 あはてて語り、急に顔色を變ずること ○怒號 大聲にて怒る。號は大呼する也

○大高坂芝山 土佐の人、名は季明、字清介。芝山、黃軒、一峯など號す ○荻生徂徠 江戸の儒者。名は

稱惣右衛門。葵園。又は赤城翁と號す。 ○節分 立春の前日。冬の節の分れて春に移るを以て名づく ○赤貧 一文なし ○意

に介せず 氣にかけざること ○處士 官仕へずし、家にある士 ○誘掖 たすけ道びく

六 雪も笠も

短歌

○鳥の跡 古、支那の蒼頡が、鳥の足跡を見て文字を發明せしといふより、出でて文字のこゝをいふ ○語りつぐべき名 後世までもいひつたへらるべきほまれある名

七 小話二則

徒然草

○小野道風 平安朝の能書家。好古の弟なり。醍醐、朱雀、村上の三帝に歴事せり ○和漢朗詠

○御相傳云 藤原公任の撰。二卷より成る、平安朝の中世より曲節を設けて詩句短歌を朗吟すること行はれ、本書はその朗詠をあつめたるなり

○四條大納言 藤原公任

○祕藏 大事にしまつておくこと

○出雲といふところ 丹波國、南桑田郡千歲村字千歲をいふ。元明天皇和銅二年の創立、大國主命三穗津姬命を

る

○大社 出雲の大社にして、大國主命を祭る。杵築大社ともいひ、出雲國杵築町に在り

○しるところ 地領

○いざ給へ 闘。サア來給へといはんが如し

○かいもち 搦練の餅。蕎麥ねりこ、ぼたもちな

○解説區

○ゆゆしく 文の關係によりて、貴みかしくむ。いまはし、いさ

殿は貴人の御身を指していふを擲りておぼします所ないふ意なれども、さまで貴

○無下 無下で不注意なりきたしなむる意

○都のつと 都へのつと(土産)

かしがり ぬかしく思ふ。何ぞ

○おとなしく 老成の意

代罪に悪、不祥、不長、

八 登蓮法師

徒然草

○渡邊の聖 〇あまりに物さわがし 山なり 〇無下の事 蕪しく下

九 懈怠を戒む

今日の書面

○懈怠 怠る。なまけお

〇もろ矢 矢は一手きて三筋をもつ。はじめ射る

〇初心 初め

〇あるそか 疎末。よ

〇一刹那 梵語 Kshana 極めて短少なる時間。此

〇才覺 才覚

〇香かに 〇知音 親しく交はること

〇一松の下露 太 平 記

〇さる程に 既にして 〇類火 類焼に同じ。他の火事

〇主上皇 〇卿相雲客 三公、大納言、參議を卿相又は月

〇餘煙のこり 〇行跡 あす

同じに
 ○辱く かたじけな
 ○十善の天子 天子は其前身に十の善徳を修められたる報によりて、生まれられたりさいふ佛説より出で
 ○玉體 ぎよくたい 田舎もの。禮節になら
 ○田夫野人 でんぶやじん はぬものを指していふ
 ○赤坂の城 あかさかのしろ
 楠木正成の あをつが 青く苔蒸 あせむす
 ○青塚 あせむす 寒草の疎なる 陰曆九月の事なれば、小
 居るをいふ さき草の枯れたるが、ま
 ○茵 しとね 羅穀類にて、目のすいたる薄き織物 幽
 谷 おく 現の夢 うつつゆめ ○さして行く 笠の縁語 ○あめが下 した 廣い天 下をい
 谷 おく 又雨が下に 御身をのがれ ○松井藏人 まつゐくらんぼ ○案内者 あんないしや
 いひかけたり かくるべき家 ○網代の輿 あじろ 青い竹を薄く細く削りてあじろを組みて輿 張輿
 てをよく知 てんおんうんなん 天皇に忠義して、己の身 の榮達を期せよこの意 ○義兵 ぎへい 正義を守りて、亂 軍隊
 する しよせん 所存 がへん ○道 みち 忠義 もたし 口をつぐみ うたて しけ
 意にいふ あじろ 網代の輿 にし 青い竹を薄く細く削りてあじろを組みて輿 張輿

にてまほりを張り詰めて、
 おしぶちをうちたるもの
 ○怪しげ あや 粗末なること 南都 奈良の
 ○錦の御旗 にしきのみはた
 ○柿の衣 かきころも 柿色の無紋の衣にて、
 山伏などの服なり くひせ 木の 芋瀬 今の和國吉野
 百瀬 へい 現つ御神 あま 天皇を くしみたま 天神地祇の靈魂をみたまさいひ、其
 魂 たま さいふ 奇 御魂 の 奇靈の徳を以て、百事を識別する
 一三 吉野の秋霧 よしののしゅうき 神皇正統記
 ○内侍所 ないじどころ 神鏡を奉安する所。後轉 神璽 三種の 顯家 親房卿の嫡男
 顯能の二 かいだう 海道 東海 ○奈良の京 なら 在ます所は即ち京なり 男山
 弟あり 山城國綴喜郡石 ○空しくなりぬ 死すること。閏七月二日 ○いふばかり
 清水八幡宮あり

なし 何ともいひ
 ○さてしもやむへさならす さて、そのまゝにして、す
 ていもおくことが出来ぬ
 ○陸奥の御子 陸奥太守 義良親王 ○顯信 春日少將と稱す
 ○節度 れいめい ○儲 ちよ
 の君 皇太子 義良親王 ○道の程も辱し 道中にては、
 ○啓す ぐ 申上 ○よ
 そひ した ○おごろくしくしく 恐れ多い
 ○さぶらひ 御いで ○内の
 海 霞ヶ浦 ○鄙の御住居 賤しき 御住居 ○皇大神 天照皇
 ○いと 甚し
 ○戊寅の年 三年 延元 ○もろこし 支 那 ○大日本島根 我國をほめていふこ
 同し ○播きあへねば 涙をばらふに筆に かくさかけたり ○仲尼 周代の聖人にて、春秋を
 素意 らの心 ○左大臣 藤原経忠 著はす。孔丘の字。孔子
 一四 成敗と是非 島田三郎

○成者 成功せ 人 ○不遇の歎 時にあはせずして、不
 仕合せを歎くこと ○雪冤 耻をそ、
 見考へ 見考へ ○擧 きたる 西山遺事 安積覺、中村順言等の編せしものに
 ○千手村正 鍛刀の名匠 ○調伏 人をのろひ 卓見 すぐれた
 ○史氏
 歴史を かく人 ○回護 かげふ 積習 積み來れる長 高士 節儀高
 鑑 天のか 大人 大徳 ○君子 盛徳 知己 善く己れの
 載 世の 標 準 手本。標は木表、準 は水平なつくるもの ○天
 一五 楓橋と寒山寺

○楓橋 蘇州吳縣の西三十里に在り。楓樹あるを以
 て名づく。今即ち蘇州城閭門の外に在り ○姑蘇 吳王闔閭の築き、
 姑蘇臺の地
 ○蘇州府 上海を去る二十八 里吳淞江に臨む ○元標地 諸街道紀程の元
 標を樹てたる地 ○驛站 宿驛の旅
 人が物を

ふる處

○穹窿

大空のそりまがれるさま。弓形、半圓形をいふ

○煙火蕭條

煙火は炊ぐ煙、蕭條はものさびしきさま

○寒驛

まづしき村

○南船北馬

支那の南方には揚子江、珠江の如き大河、運河など多きを以て、行旅多く船を用ひ、北方は平原なるを以て多く馬背を借る。それより

絶へず諸方へ旅行するを南船北馬といふ

○上國

都邑、京城などの意。こゝは北京

○江蘇

二十一省の一。江蘇省にして三國の吳の地

○刺史

一州を治むる長官

○完膚

疵なき箇所の意

○手あき

一六

ピラミッドとスフィンクス

徳富蘆花

○大ピラミッド

ピラミッド中の最大なるものにして、世界建物中の最大なるもの

○撮影

寫真を撮ること

すひする

○赤花崗石

花崗石の赤みを帯びたるもの

○青天白日

清明なる

○眼

を信する能はず

實景に對すれども、眼に見る所を以て實景を信する能はず、宛然繪を見る如き心地なるをいふ

○石灰石

炭酸カルシウム

○悲劇

觀客に悲哀の情を催さしむる演劇。轉じて悲哀なる出來事にいふ

○凛然

さま

○膚に粟す

おそれて、膚に粟つふの出來ること。甚しく恐るをいふ

○汪洋

水の廣く深き貌

濤

○小刀

しては以ての意

一七

雙陸

幸田露伴

○骰子

○是是

○團樂

○計技

一八

扇的

平家物語

○判官

○七八段

○柳の五衣

○大將

下に五つ重ねたるをいふ

○皆紅の扇の日出したる

まつかの扇に金箔にて

柳は表白にして裏青をいふ。五つ衣は表衣の

軍 義経を指す

○矢面 矢のきび來

○手だれ 手ききのもの

○那須太郎資高

○小兵 小が

○さん候ふ さんやう

○楊 楊色の濃きをいふ

○大頸み おおく

○端袖 一幅半の中袖口の半幅の部分ないふ

○いろへたる直垂 美しき直垂

○萌黄絨

の鎧 萌黄にてたごしたるよるひ

○足白の太刀 帯取の金具を銀にて造れる太刀

○切文の矢 鷹の羽

黒く中間自きを以てつくれる矢

○ぬための鏑 鹿の角にてつくりたる鏑

○滋藤の弓 五分づつ間をおき、一寸ばかり

りづつ細き藤にて巻きたる弓

○高紐 纏のひき合せの胸の上にてかける胸釣りのひも

○一定仕 ちやうどつかま

必ずしきるる程の人

○御誂にて候へば 仰のこゝろ

○まろはやすつたる木をま

ろくしたる紋を具にて摺り出したるをいふ

○金覆輪の鞍 金にてへりたる鞍

○矢頭 矢のさき

○扇のあはひの問

○酉の刻 今の半後六時

○くつばみの古者

○わが

國の神明 與一自分の生國なる下野國に在す神

○番ひ

○能つ引いて 十分にひき

○十

二束三伏 十二つかみさ指を三本ならべた長さ

○舷を敲いて なたたく

○箆 矢を盛り背に負ふもの

一九 平家の興亡

○春日 春日明神の略。藤原氏の氏神

○氏神 總本家の祖先の靈を祀れる神。ここにいふは一般にいふ産土神をいふにあらす

○受

領 平安朝中世以後、國司の赴任して吏務を掌る首席のものないふ

○睽離 睽は目を反す、そむく意。相そむきてはなれくさなること

○北

面の侍 院中を警護する武士

○洛中 京都中

○跋扈 ばびこ

○皇儲冊立 皇太子を

天子の位 につけること

○月卿雲客 月卿は三位以上の人。公卿。雲客は雲の上人。殿上人。

○雌伏 雌鳥の雄鳥に従ふ意にて、人に屈伏するをいふ

○木偶視す 木の人形の如く見なす

○個人 國家又社會

別々の人の稱

○階級 等級

○鐵拳 武力をいふ

○牢籠す せりこ

○典

故れいば

○一噓にだも直せず 一笑の値もなしこの意。噓は大笑なり

○傍若無人 人を人と思はざるふ

はざるふ

○桎梏 足かせの手。拘束の義

○悲壯 悲慘にして壯大

○呆然 呆るさま

手を束ねて 何の手出し

○落魄 ぶれ

○昇殿 四位以上の官人及び六位の職人が禁中の御殿に昇ることを許さるゝをいふ。昇殿を許されたる人を殿上人といふ

取る 清國の國司などの爲めに、牛飼

○紋爵 始めて従五位下に叙せらるゝをいふ

○受領の鞭を

敏腕。う 意などの賤役を務むるをいふ

○鼻息を仰ぐ 人の喜怒をうかがふ意

○辣腕

できし 無碍 さまはりな

○師表 先生

○堪能 其道に至り深きこと

○巍然

高くそびゆるさま

○後塵を拜す かふる義

○高倉宮 後白河天皇の第二皇子、以仁王

令旨 親王の命令の文書

○純袴 貴族子弟の服。轉じて貴族の子弟をいふ

○追躡 うつこと

○皮相の見 かんがへの

○獅子奮迅の勢 獅子の怒り吼ゆる如く、滿身に力をこめて勢烈しく突進すること

○幕進 まつしぐらに進むこと

○禍蕭牆のうちに起る 蕭牆は門屏なり。禍患の近く内部より起る義

○軟化 唱へ來れる強硬なる意見を棄て、反對論に同すること

○過渡時代 事物が已に舊態を脱して、未だ新態となさざる間の時代

○本能 自然に要求し、自然に行動する性能

○焦點 物事の集注する箇所

二〇 待賢門の戦

平治 物語

○生年 生きある年の義。年齢

○櫛句の鎧 上を櫛色、次を黄、其次を薄黄とし、末は白色にて威せるをいふ。句は、すべては

○裾金物 菱縫の板にうつつ金物

○小鳥といふ太刀 平家重代の名劍

○切文

の矢 驚の色の白黒の文(フ)のきれわかれの明白なるものをいふ

○重藤の弓 黒のりの弓の上をこまかく間を

の持つ 弓なり

○黄鴨毛 白に極薄き岱緒色を帯びたるもの

○貝鞍 螺鈿の鞍

○華洛 程の意

○大内 中宮

○昭明 承明門のこゝなるべし

○梅壺 凝華舎と

○桐壺 淑業舎(イシヤ)

いふも ○籬壺 詳かな ○東光殿 殿の誤ならず。登花 ○ゆゝしく 雄

の意 ○南階 紫雲殿の南の階 ○太りせめたる いたく太り ○逸り切つた

る逸物 眞あらだち、心の勇 ○舍人 牛車の牛飼、乗馬 ○天馬 馬 早き ○弓

手 左の方の手。弓を ○不覺人 根性のたし ○棕の木 ○轡の古語

○名のれ 名を告 ○帶刀先生 先生は長 ○見參 會ふの ○端武者

兵雜 ○おし雙べて 馬上にては、正面より組ますし ○向う様 面さ向 ○新

手 ○嫡々 へつぐこま ○誰か嫌はん 我も嫌はず、御身 ○色も變

らぬ 前の出で立ちに ○面も振らず 脇目も ○引きたちたる 勢 逃げ

つきたる勢 ○馬の足を立てかねて 馬を立直して再び ○大宮を下りに云

云 大宮通りを北へ、二條の大路を東へ落ちのびたるをいふ

二 源 三位

○さして世に用ひられず 保元平治の戦には、一方の先陣を賜はりて兇徒を平げし

くの年月 を経たり ○空 多人數 ○宣言 天皇の ○後徳大寺左大臣

實定公 なり ○山門嗽訴 平安朝中世以後、比叡山延暦寺は僧兵を養ひ、意に満たざれ

遅ふせる ○日吉山王 比叡山の東麓に在る日吉神社なり。大山咋をまつる。叡山

輪の大物主神を祭りて大比叡神と稱し、日吉神と共に山王と稱せしによる ○のぼ

るべき便 官位の上進 ○朝家 皇室 ○六代の君 崇徳、近衛、後白河、

二 三 謠曲と狂言

○偉觀 立派な 〇向上 発達する
 ○散樂 〇曲藝 〇習氣 なら
 ○典雅 〇迂愚 〇弱點 〇人の頤を解かし
 〇水墨畫 〇新機軸 〇子に

二三 攝待

〇旅の衣は云々 文にして、旅情の辛酸を述ぶ 〇篠懸 山伏の
 〇子に 〇かしまし 義經の一行に繼信、忠信の館なる
 〇かづら つの韻なり 〇莊司 莊園内の雑務を 〇そにて

二四 梅花

〇雪肌玉骨 雪の如く白く清らかなる肌、玉の
 〇茅舎の家 〇竹籬 竹のけがき 〇三國 魏、吳、蜀をいふ
 〇絶唱 詩歌の格調のすぐ 〇好事の士 元來モノズキの意な
 〇利生 利益 〇深き契 佛教には、親子は一世の契、夫婦は
 〇御矢面云々 矢の来る正面に立ち 〇胸板 胸の上部
 〇押付 背面にて背 〇大事の手 傷
 〇總角 背後につきたる緒 〇着背長 鎧の別名。大將
 〇綿嚙 背の押付の板より胸板に續 〇秘藏に
 〇八旬 八十

〇雪肌玉骨 雪の如く白く清らかなる肌、玉の
 〇金屏 金の屏風 〇七寶 七寶燒
 〇西湖 支那浙江省に在り。杭州府
 〇好事の士 元來モノズキの意な

の意に用ひたり

○太宰府

筑前國御笠郡太宰府村に在り。一に宰府ともいふ。西海道九國三島を總轄し、兼れて外寇を防ぎ、外交を司るること

○左遷

祿を減じて遠地に謫せらるる義

○こち

東風にして春風の義

○思出

過去の事を思ひ出して心を慰むる事、又後に

至りて今の事を思ひ出して、自ら慰むべき程の心ゆくわざ

○安倍宗任

頼時の第三子、貞任の弟。後筑紫に下り松浦黨の祖となる

○無

骨の義

○骸

古への武器の名。矢を盛りて、背に負ふもの

○記勝

月瀬記勝

○月瀬

里半。大和國添上郡月瀬村に在り

二五 公園

幸田露伴

○天真

生れしまゝなる純粹の性

○空氣の混濁

煤煙、有毒瓦斯、塵埃等のたれに、にこりけがれるをいふ

○空氣

の代謝

植物の葉と空氣との關係をいふ

○娛樂の具

運動場及び運動器具、音樂堂、動物放飼場、植物移植場等をいふ

○逍遙

あるき

○鮮麗

あざやかにうるはしきこと

○快晴

きもちよく、はれ

○蟄居

引きこもり居ること

○腦裏

のうち粗食を

○醉生夢死

一生を醉夢の間に送る義

○陋習

二六 我が國の海運

○杳渺

廣々として、るかなるさま

○煙波

水け四方にうみをめぐるにたること

○闊歩

大股にて歩くこと。轉じて他にか、はるることなく思ふまゝに航し廻はること

○鎖國政策

○羈

束らるること

○天馬伏櫪

駿馬が伯樂に遭はずして、他の驚馬と同じく櫪の前に起臥すること

○宇内

に同

○經營

はかり營むこと

○蘊蓄

深く貯ふること

平生からの養成しあるもの

○航運

船にて物を運ぶこと

○浮寶

ぶれ隣國と仲よ

○玉帛聘問

玉や織物を携へて訪問すること

○震慄

ふるひ、おはかり

○**觀光** くわんくわう その國の風光を見物して歩くこと
 ○**欵待** くわんたい 待遇すること
 ○**上下合體** じやうかがつたい 在朝の野の人も一つ
 ○**使節** しせつ 君主のつかひ
 ○**封侯** ほうこう 大名に封じ給ふこと
 ○**致命傷** ちめいしやう 命にさしはる程の大きき傷
 ○**非望** ひぼう 分限を超えたる希望
 ○**發覺** はつかく あらはれること
 ○**異教** いけう 天主教
 ○**敢爲冒險** かんわほうけん おしあつものごころをおかしたる事
 ○**角逐** かくちく 互に争闘すること
 ○**桎梏** しつこく 手かせ足かせ。自由を妨げること
 ○**萎靡** みひ 沈滞 ちんたい 勢よわりて、へんたれしりごむこと
 ○**懶眠** だみん おこたり、ねむり
 ○**覺醒** かくせい 目をさますこと
 ○**警鐘** けいしゆ いましめ
 ○**趨勢** すうせい ゆきなり
 ○**締結** ていけつ ぶらむすこと
 ○**開國進取** かいこくしんしゆ 國を開いて、困難を排して進み取ること
 ○**嚆矢** かうし 第一のはじめ
 ○**瓦解** わかい こぼれさること
 ○**頡頏** きつがう 互にはりあひて相下らざること
 ○**驚倒** きやうたう 大に驚くこと
 ○**道程** だうてい のり
 ○**平和的争** へいわたまき 戦争によらず、實業上の勢力の競争
 ○**消長** せうちやう 盛になること衰ふること
 ○**天賦** てんぷ 自然に與へらるるもの

二七 保守と自由

○**宮殿** きやうてん 宮城に同じ。皇居
 ○**城樓** じやうろう 城のやぐら
 ○**奇異の服裝** きいふくさう その服裝は三百年前と服を着けたり
 ○**成文の法律** せいぶんはふりつ 文章に記載されたもの
 ○**權威** けんい 権力の威勢
 ○**理性** りせい 吾人の用之根本。吾人が本來具有する知的能力
 ○**墨守** ぼくしゆ 墨翟之守の略。能く誠を守る義。轉
 ○**傳說** でんせつ 代より傳稱せること
 ○**絶對** ぜつたい 何等の束縛條件に制せられざるをいひ、又は最高程度の性質より傳稱せること
 ○**絶對** ぜつたい 何を示す語。相對に對していふ時は、一切の關係より獨立の義をいひつたへること

二八 ドイツの發達

○**牛耳を執る** ぎうじ 諸侯の盟には牛耳を割き、血を啜りしなり、而して牛耳を執るは尊者の役なれども、こゝは盟主の義に用ひられたり
 ○**龍** りゆう 龍の擧るが如く、威勢の盛んなるをいふ
 ○**泉々** くわんくわん 日月の明かなるさま
 ○**平和の戦争** へいわたまき 龍虎視 りゆうこし 如く、威勢の盛んなるをいふ

武力の戦争に對する實業の戦争 ○符牒ふてふしる ○極印ごくいん符牒さしの捺印 ○復讐ふくしふの念ねん云々 七一
 年普佛戦争の結果、佛國はアルサス、ローレンの二州を割きて普に譲り、更に五十億法(十億弗)の償金を支拂いて媾和せしかば爾來佛國民はこの屈辱を忘れずして復讐の念熾
 りん 〇恩賚おんらいめぐり 〇宿弊しゆくへいつもりつもりたる 〇消極的せうきよくてき物事に對し
 をいふ。消極は積極の反對にして、退守、靜止、不變等の意をあらはす 〇積極的せききよくてき消極の對語にして、進取、活潑、
 退守、靜止、不變等の意をあらはす 〇積極的せききよくてき活動、變化等の意をあらはす
 〇槿花きんくわの露つゆ槿花に置く露の如き果なき義。槿花はムクゲにて説文に一 〇牙籌がちう
 〇牙籌がちうを執りて計算する義。轉じて商業に従事するをいふ。牙籌は象牙を以て衆獸の畏服するに喩せしが、こゝは覇を稱する程の意 〇獅子吼ししほ
 もと佛家にて、群邪異學を畏れず説法するを、獅子吼へて衆獸の畏服するに喩せしが、こゝは覇を稱する程の意 〇九泉きうせん地下を

訂補 新體國語教本詳解 卷八 終

訂補 新體國語教本詳解 卷九

一 かしこきあたり

- 天あまつ日ひ嗣つぎ 天皇の御位
- 大おほ八や洲しよ 〇長ながへにに 永久
- 禁きん裏り 中ちゆう 〇神かんさりましし 〇御ご軫しん念ねん 配はい 御心
- 遷せん幸かう 主上の遷都 〇聖せい運いん 天皇の御運 〇還くわん幸かう 主上の行幸先よ 〇逆ぎやく鱗りん 天皇の御怒り
- 業大 ○宸しん襟きん 天皇の御心 〇南なん山ざん 吉野山を指していふ 〇行あん宮ぐう みや 〇崩ほう御ご 天皇の御
- れか ○式しき徽び 甚しく衰ふること 〇朝てう儀ぎ 朝廷の儀式 〇供く御ご 主上の御膳 〇叡えい慮りよ 天皇の御心
- 〇行やう幸かう みにゆき。天皇に限りていふ 〇御ご幸かう 主上のみにゆき 〇駐ちう輦ふん 天子の御車を駐めたまふこと 〇鹵ろ

行幸の御行列 ○牽制 引きこぎめ自由 ○鳥兔匆匆 歳月の経過のすみ
 邁 勝れて賢 ○國歩艱難 國家の多事 ○風夜 風は朝早きこと、夜は夜遅きこと ○玉
 體 天子の御身體 ○九重 給ふところ ○御階 是しきざ ○風そよぐなり 風の
 立つること ○御製 給へる御歌 ○龍顔 天皇の御顔 ○御曇 御心配
 ○いはまもあやに畏さ ○陛下 天皇及太皇太后、皇太后、
 御誕 ○儲位 太子又は世子 ○踐祚 皇太子の天子の御位 ○一世一元 一代に
 生 ○登極 天皇の御位に登 ○南殿 紫宸殿 ○五事の御誓約 誓文を指す
 ○親裁 天子自身に裁決 ○賢所 宮中に祖宗を祭り、神鏡を ○優渥 けな
 つきこと ○鸞輿 天子の御 ○至尊 主上。 ○休戚 なしみこと ○天

覽 天皇の見 ○假初 重大なら ○裁可 主上の御許可 ○宵衣旰食 宵衣は夜
 けやらぬに起き出でて御衣を着け給ふこと。肝食は日たけて朝食をきこしめ ○天機
 すこと。共に主上の國事に大御心を勞し給ひ、爲に寢食を忘れ給ふ意に用ふ ○天機
 天皇の御機嫌 ○御違例 御かばり。御 ○大元帥 國家の兵權を統率する ○竹
 の園生 親王又は皇子 ○統監 全體を統べ監 ○龍馬 すぐれて ○跋渉
 跋は山に登ること、渉は河を渡ること ○駐驛 天子が行幸中に ○大纛 大元帥の大旗の義。
 〇司令部 司令官の事務を ○行在所 假の御殿 ○規箴 しめ ○勅諭 天子
 〇人民に諭し 〇臨幸 親しく行幸して ○便殿 休息の御殿 ○勅旨 のりの
 告げ給ふこと ○典籍 物書 ○乙夜の覽 天子の書を見 ○碩學 大學 ○御
 意 ○允文允武 允は、マコトと訓ず。文武の道に達し給ふを申す語 ○つかさ人
 歌 皇后陛下のよみ給ひたる歌

役人。各事務をつかさどる官

○まかでし

まかるは、貴人の許より退くをいふ

○坤徳 坤は地なり。皇后陛下の御徳にいふ

○行啓 太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮、又は東宮のみゆき

○還啓 皇太后、皇后、皇太子の行啓先よりの御歸り

○廣

前 神殿の御庭

○玉申 神の枝に木綿をつ

○御稜威 御威

主上をたふさびて申上ぐる語

○鼓腹 食物に満足して、氣樂 身を休まするさまにいふ。はらつづみ

二 明治の一瞥

(一) 維新の前さ後

○變革 へかく かほり

○趨勢 すすむ なりゆき。向ひ行く勢

○簡素 かんそ じか

○面目 めんもく やう

○千

里の江流 一日にして下る 早きをいふ

○千歳稀観 せんざい みる 極めて稀なる見物

○激

變 へん かげしき

○儼然 げんぜん いかめし

○綾綸子 あやりんす 高貴の織物

○兀坐 ぶつざ ぼんやりさし座すること

○典型 てんけい 手本

○後胤 こういん 孫

○青雲 せいうん 立身出世すること

○秩序 ちつじょ 物事の順序次第

○怨嗟 げんさ 怨みなげ

○傳馬 でんま 宿次ぎの馬

○四手駕籠 しようて 竹を四隅の柱とし、竹に編みたる粗末なる駕籠

○五節供 ごとく 人日、上巳、端午、七夕、重陽の五節句

○喝道の制 かつだう 先拂ひのあきて

○騶從の儀 そうじゆう 御供の儀式

○更新 かつしん かね新し

○陪臣 ばいしん 家來

○公武 こうぶ 公家、朝廷と武家(幕府)

○材幹 さいかん 材

○咄語の聲 だつご 讀書する聲

○士人 しじん さむ

○跋扈 ばつこ ころ

○盡瘁 じんすう 力を盡して勞苦すること

○鎖磨 せうま つかひ

○墨守 ぼくしゆ 墨翟がよく城を守りたるよ、物事を固く守るにいふ

○徒爾 とじ いたづらにいふ

○彷徨 ほうわう さま

○鉅萬 ぎよばん 莫大の數

○累代の老賈 らいだい 代々のふるき商人

○財界 さいかい 經濟社會

○元老 げんらう 年久しくつとめ功勞ある者

○天分 てんぶん 自然の務

○浮世繪 うきよゑ 浮世の風俗を盡きたる繪、土佐風より分れ、岩佐又

兵衛の扱めたるもの

○輕文學 けいぶんがく 通俗文學

○童蒙 とうもう 子供、いさげなくして智識の少きもの

○凡俗 ほんぞく 俗人

○好尙 かうせう すき

○見解 けんかい 意味のさり方

○凡俗 ほんぞく 俗人

三 櫻の賦

○御階にちかく左近の櫻をいふ

○これだになくば云々櫻の花がなければ、世の人の心は静かなり

の意。業平の歌に「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」

○ひねもす終日。一日中

○櫻がり見花

遊花を探れ来て遊び暮らすこと

○つと産土

○朝ぎよめ朝の掃除。朝、庭などを掃きて清むること

○殿守どのもり

主殿寮の小吏

四 春色秋光

正岡子規

○春色しゅんしよくはるのけしき

○秋光しゅうくわうけしき

○熙々ききき和らぎ樂しむさま

○凋落てうらくかれる

○熙々ききき雍々おうおうぐさま

○穠艶華麗じやうえんくわい花木の非常にきれいなさま

○褪すせうす

○金氣きんき肅さう

殺ころ秋の氣の草木なからすこと

○世よの中なかの歌うた

世の中にたえて櫻さいふものがなかつたらば、よし雨風があることも心配がないから

春の我心はのどかにしついであらうさいふ意

○月見ればの歌つきみ

秋の淋しいのは、自分ひかりではなかつたが、月を見ること何さなくものさびしく

して、思はず涙のすゝむやうに思はるゝさなり。千々はさまざまの意

○直紋ちよくんにかきつける

○石いし激げき詞し。小

石の上を走る意

○垂見たろみ古語こご

○今朝之旦開云々けさのあさけ

今朝のあけがた、空を鳴き渡る雁の音を聞きて、之れにより

りて秋たるを知りたり。然れば春日山は定めて色づきはじめしならん、さて心さびしく感ずるさなり

○和氣わき洋々やうやう和らぎた氣の満ち溢るゝさま

○連感れんかん見聞したことを思ひ出すこと

○抽象ちゆうしやうのものを引きぬくこと

○トつく

○肅殺さうさい淋しきさま。物凄きさま。

五 萬里長城懷古

土井晩翠

○征驂せいさん征馬に同じ。旅人の馬

○俯仰ふぎやうの天地

○遊子いうし旅人

○平蕪へいぶ草々くさくさ平野

○覆圖はくど諸侯に旌頭たる謀

○たゞなかただなかなま

六 奈良の舊都

- 風蝕 風に浸さるること
- 七堂伽藍 寺の三門、佛殿、法堂、食堂、僧堂、浴室、東司をいふ
- 古名刹 古き高き寺
- 麥隴 麥ばたけ
- 相輪 塔の頂につけたるもの
- 七寶瑠璃 金銀瑠璃以下七種の寶物
- 金堂 寺の本堂
- 殿閣 寺の建物
- 遺韻 のこりのやうす
- 駒々 獨り行くさま
- 髣髴 も似ながら。さま
- 佛師 佛像を刻み作る職人
- 一抹 ひとすじ
- 依々 柔らかなさま
- 麋鹿 亦鹿の屬
- 濯々 肥へてつやあるさま
- 豪華 麗しく。ぜいたく
- 東 東の
- 梵唄 如來を讚歎する贊、稱名
- 摇曳 長くひくこと
- 戒壇院 佛敎にて戒めを授けたる所
- 一瀉千里 河の流の急なる形容
- 際會 其のをりに出會ふこと
- 燦然 かがやいたるさま
- 古事記 文明天皇の朝、太安履が、神田の阿禮の口傳によりて我國古代の神話及び歴史を記したるもの
- 書紀 三十卷。舍人親王者。神代

七 萬葉時代の歌人

- 風土記 二卷。諸國の風土を記せるもの
- 懷風藻 一冊。淡海三船の撰
- 頌儒者 大學
- 萬葉集 二十卷。我國最古の歌集。仁徳天皇より、淳仁天皇までの歌を集むる
- 輩出 續いて出ること
- 歸依 仰信
- 斐然 あやあや然
- 皇謨 天皇のはかりごと
- 高潮期 時勢の尤も高まり興りたる時代
- 鸚尾 鸚の頰。宮殿などの棟の端に飾るもの
- 金玉の響 詩歌の詞のうるはしき響
- 長歌 句数の多きうた
- 壇場 立ち
- 格調 詩歌の字句の組織又は調子
- 歌聖 歌に尤も勝れたる名人
- 即興 即坐の興味
- 淺膚 あざか
- 蕩逸 締なく。攪まなること
- 沈痛幽玄 沈んでおくゆかしきこと
- 森嚴莊重 ほご厳かにして、手重きこと
- 祝詞 のりと
- 九鼎大呂 夏后氏の初禹王が諸侯の鐘を集めて、鑄たり、大呂は宗廟の大鐘、共に傳國の

寶器として貴重なるより、世間に於ける地位の重きにいふ ○名聲 げんやう ○秀容 すぐれたるかたち ○痛切 いたせつ

甚だ事情に ○熱烈 ねつれつ 精神奮ひ起りて勢はげしきこと ○徑路 けいろ すぎみち ○壘をも摩す せまに

り近 づく ○陸離 くりり 光彩のまじり きらめくこと ○操觚 せうこ 筆を採ること。又文章を作ること。觚は方形の器。支那の古代は之にて文字を書

きたるふ りいふ ○關聯 くれんれん つながるること ○意識 いしき 智覺、情意 等心の事實 ○天稟 てんりん 天性。天に稟

○宗廟 しようべう 帝王の祖先のお玉屋 ○戡定 かんてい 切り定め ること ○横溢 わういつ あふれ ること ○天稟 天に稟

八 鎌倉 鐔堂 隨筆

○星月夜 せいげつや 鎌倉山の枕詞 ○離々 くれいれい 草木の茂れるさま ○禾黍 くれいし 穀物 ○時めける人 ときめけるひと 勢強

○寂々 せきせき さびしきさま ○黄梁 くらうりやう 一炊の夢の虚生 ○武門棟梁 ぶもんとうりやう 武士の頭 ○蕪蘩 うれんぱん

草水 ○丹塗 になり 赤くぬりたること ○いやちこ たら 開基 かいき 寺院の創立者 ○檀那 だんな

主施 ○勤行 こんぎやう つとめ ○真如の月 しんじよ つき 煩悩溶けて現はれ出づる心の本體 ○管屋 とうまや 管にて葺きたる家。管

は蘆茅などに てあみたる物 ○土室 ちちむろ 牢士 ○あなり ありの約 ○忍辱 におんじやく 耻辱を忍びて怨

○時の風 ときのかぜ 五風十雨といふ如く時順なる風 ○忍辱 耻辱を忍びて怨

九 鎌倉時代の文學

○銳意 さいい 心をほげますこと ○時流 じりりう 當時の風潮 ○名匠 めいしやう すぐれたる學者 ○遵勁 じゆんけい 強味を

○直截 ちよくせつ 直覺的に辨識すること ○創翹 せうせう はじめむること ○質實 じつじつ 質朴にして飾なきこと ○悽惋 せいえん

すこくあはれを催したる調 ○繁縟 はんじやく 事のわづらひしきこと ○史實 しばつ 歴史の事實 ○拘泥 かうでい かつはり

○萬斛 ばんこく 甚だ多きこと ○文藻 ぶんさう 詩文の才

一〇 西行法師

○岫山上 ○掬び 兩手にてす
 ○靈蹟 佛の在 ○朶き 手引 ○結縁
 佛道に縁を 結ぶこと ○せと 極めて小
 ○わびしき 淋しき ○八重葎 繁茂せ
 つ澤 地名にあらず。唯 一般にいへるなり ○飄然 ぶり

○かしづく 附き添ひ まもる ○賤山がつ 賤しき 木こり
 ○幽鳥 奥山に 居る鳥 ○鳴た
 一 奥の 旅路 奥の 細道

○風騷の人 詩歌など作る風流の人 ○俤 〇茨 〇あやめふく日 五月五日の端午の節句の日
 ○馬酔木 〇多賀城の碑 陸前國宮城郡多賀村多賀城址にあり ○四維 東西南北 ○按察使

古昔、諸國の風俗、教化などを視察せる官職の名 ○朝獨 藤原仲麿の子 ○歌枕 所 ○歸旅 び ○入相の鐘 撞く鐘 ○鹽竈の明神 陸前國鹽竈町に在り ○國守再興 元祿二年伊達綱村造營せし

○宮柱ふとしき立て 社殿の柱を太く堅固に建てたるをいふ ○彩椽 いろざりたる美しき椽

○きらびやか 光る貌 ○朱の玉垣 朱ぬりのたまがき ○雄島 松島村の本陸より渡月橋を渡れ

○扶桑 我國の異名。扶桑といふ ○洞庭 湖南省岳州府にある大湖 ○西湖 支那浙江省にある名勝 ○浙江の潮 前に浙江省杭州府の西湖の事をいへるに

○造化の天工 神のたへなる細工 ○平泉 陸中國西磐井郡に在り ○雉兔芻蕘 雉兔は獵人なり

○造化の天工 神のたへなる細工 ○平泉 陸中國西磐井郡に在り ○雉兔芻蕘 雉兔は獵人なり

○南都 陸中國盛岡市の北方の稱 ○國破れて云々 國破れて云々

○つはもの 武士

○經堂 經を藏する堂 ○三將 三代に同じ ○光堂 金色堂といふ。金碧を以て塗

び山河草木などのいたづらに存するさま。唐の杜甫の春望の詩に「國破山河在、城春草木深」の句より來れるなり

衣川館といふ、秀衡義經館をここに館せしめしといふ ○南部 陸中國盛岡市の北方の稱

支那浙江省にある名勝 ○浙江の潮 前に浙江省杭州府の西湖の事をいへるに

○造化の天工 神のたへなる細工 ○平泉 陸中國西磐井郡に在り ○雉兔芻蕘 雉兔は獵人なり

○南都 陸中國盛岡市の北方の稱 ○國破れて云々 國破れて云々

○つはもの 武士

○七寶 普通には金、銀、珊瑚、琥珀、瑠璃、瑪瑙、眞珠をいふ。 ○薨 ちは ○五月雨の句 五月雨日もふりつづく故、すべての物は皆朽ちる折から、此金堂のみは、千年の後も昔のまゝに光りかがやきてゐるは、これ五月雨のふりのことしたるならんかとの意

二三 孔子の好學

蟹 江 義 丸

○晚年 年老いたる時 ○回顧 ぐらす ○十室之邑 十軒の村。極めて小きき里をいふ ○追

慕 たること ○日暮 晩朝 ○知了 知りさること ○葉公 名人 ○詩書禮

樂 詩經、書經、樂記、樂記。 ○經書 したる書物 ○通曉 知るこゝ ○宋儒 宋の

○生知 生れながらにして知るこゝ ○安行 心にあんじ 行ふこゝ ○修爲 身に修め

る見解 辯疏 わけ ○不世出 世に多くあら ねれざるこゝ ○謬見

二三 釋迦の奮闘

村 上 專 精

○遂行 成し遂げ 疾生 生ずる ○悉達太子 衆生民人 ○濟

度 其の道をさ 眷屬 やから ○左抵右悟 左右抵悟をあやなしてかけ 成

道 其の道をさ 煩惱 心身を惱ま 正覺 正しき ○耶輸陀羅 ○攪

亂 だす 涅槃 滅の義 切實 ねんごる ○熾盛 盛るこゝ

○颶風 じつじ 泰然 やすらか 慶殺 ろし

一四 天才

夏 目 金 之 助

○見地 見る所。 習ふる所。 ○奇傑 不思議にすぐ 凡庸 なるもの ○驍將 武

大將 財帛 いれれ 顯晦 くらきこと 能才 智恵多 水準 水は

○謳歌 衆人聲をそるへ 低回 なるこゝ 窮愁 苦しむれ 追

○謳歌 衆人聲をそるへ 低回 なるこゝ 窮愁 苦しむれ 追

○見地 見る所。 習ふる所。 ○奇傑 不思議にすぐ 凡庸 なるもの ○驍將 武

大將 財帛 いれれ 顯晦 くらきこと 能才 智恵多 水準 水は

○謳歌 衆人聲をそるへ 低回 なるこゝ 窮愁 苦しむれ 追

害がいくるしめな
やますこと

○瞭れうとして
明らかな

○燦さんとして
光りかが

○滴てき々

タラタラと
したるさま

○後昆こうこん
後の世の
人の子孫

○漂浪へうろう
ただよひ

○閭廊りやう
市町

○沈ちん

淪りん
おちぶれ
はてる

○斷蓬だんぽう
いたく零落
するさま

○草莽そうぼう
くさばら

○湮滅いんめつ
あこがた
の滅びた

○斷見だんけん

一五 義時教訓

増

鏡

○おぼし構かまふる事こと
北條氏追討の御企

○東ひがしさまを指す
北條氏

○東あづまの代官たいくわん
關東より
遣したる

○かつく
片方より
ぼつぼつ

○さるべくて云々

○はかなきさまにて云々
官軍自親になし給ふにあら

○自らし給たまふ事こと云々
官軍さはいへ、上皇御自親になし給ふにあら

○自みづからし給たまふ事こと云々
官軍さはいへ、上皇御自親になし給ふにあら

○はかなきさまにて云々
官軍自親になし給ふにあら

○自らし給たまふ事こと云々
官軍さはいへ、上皇御自親になし給ふにあら

○はかなきさまにて云々
官軍自親になし給ふにあら

○自らし給たまふ事こと云々
官軍さはいへ、上皇御自親になし給ふにあら

○はかなきさまにて云々
官軍自親になし給ふにあら

○宿世すくせ
前世の
宿縁

○見るばかり
定めた

○雲霞うんかの兵へい
軍兵

○清きよき

しに清き
戦死

○人ひとにうしろ見みえなむ云々
人に笑はるやうなる事
怯なる舉動あらばこの意

○横よこ

○かたみに云々
互に心細く涙を備して、鏡の

○かたみに云々
互に心細く涙を備して、鏡の

○軍いくさ

○かたみに云々
互に心細く涙を備して、鏡の

○かたみに云々
互に心細く涙を備して、鏡の

○軍いくさ

○御旗おんはた
錦の
御旗

○とばかり
暫く考へて

○賢かしこくも
ふに同じ

○さばか

○かしこまりを申して
罪を謝して

一六 新島守

増

鏡

○萬機ばんき
萬の政治をいふ。その機の發
する處、極めて多き故にいふ

○百ひゃくのつかさの役人

○雨あめの脚あし

○津つの國くに
攝津の國をいふ。海

○津つの國くに
攝津の國をいふ。海

○こやの野の
見陽

攝津國島上 郡に在り ○藐姑射の山 仙人の住居所なるを、や 霞の洞 所即ち

上皇の御殿にたさへていふ。仙人は霞を吸ひ雲を喰ひなどして不老不死の者さいへば、これになぞらへていへるなり ○のどげく 心静かに

すべきを、わけもなき ことわし給へりさなり ○ありく 其儘に ありて ○よしなき 理由

のがちりぐに 上皇及び諸皇子の各國にうつ されて、離散せられしをいふ ○さすらふ 流浪

屋 昔にてふきたる 御すまひごもは云々 かかる遠島の御住居は、其の時 限りてあるさへ心細きものな

るを、まして定なき人の世に、いつを限りといふことな くそこに一生を送り給ふべきは此上もなき残念なりさなり ○雲の浪、煙の波 煙

千里の浪。遙に 海づら 面海 ○かたそへて せて けしきばかり 片よ

遠き海上の意 簡略にす ○事そぎ 簡略にす ○さる方になまめかしく云々 住居にて かりの御

ばかり ○今更めきたり 此詩を今更の如く 覚えらるゝさなり ○こちたく 故ありげに造り給へり

しはげ くにひ島守よ 新にこの隠岐島の番 人さなれるものぞ ○こゝろして吹け 注意して荒く吹く勿れ

すみのおえ 住の江に住む 住の江に住む

二七 漁夫

ふみ月の異名 舊曆六月 水になれ みる みる みる みる みる みる

羽の羽 かつ鳴る かねにも鳴る 梁 又 大海神 大海のここと。又、海の神

一八 落花の雪 太 平 記

先年 後醍醐天皇 正申九年 土岐十郎頼兼 多治見國長と共に、藤原俊基、資朝を助 けて殺

救免 罪をゆる かの朝臣 俊基を 六波羅 南北に在り。 承久亂後、北

條氏代々其子弟二人を兩地に遣して職を執らしむ

○路次 中途

○交野 河内國に在り。古へ、遊獵の地にして、行幸、御幸など多し。

新古今集に「またや見んかた野のみ野の櫻の寒ければ紅葉の錦着ぬ人てなき」とあるに依る

○紅葉の錦を云々 拾遺集に「朝まだき嵐の山

契間の情愛

○ものうきに

家の事なき氣に係りて、何さなく氣の進まぬに

○恩愛の

○九重の帝都

天子の住はせたまふ都、九重は、支那天子の門九重とあるより出づ

○憂

さをば留めぬ

逢坂の關は、住き來の人は止じれどし、心の憂は止めじとの意

○逢坂の關の清水 拾遺集に「相坂の關の清水に影みえていまやひくらん望月の駒」といふ貫之の歌あるによる

○潮ならぬ海

琵琶湖は、淡水なれば、潮ならぬ海といへるなり

○打出の濱 小路を打ち出づるに打出の濱といひかけたり

○うき舟

心の憂きを浮舟の如く浮きつ洗みつするこにかけたり

○こがれ行く 漕がれゆくこ、魚がれ行くこをかけたたり

○近江路

や

人に逢ふ意を近江路

○うねの野

世を憂しといひて、宇禰野にかけたり。古今集に「近江より旅立ちくればうねの

野にたづてなくなる明

○子を思ふかこ

此句の下へ「思へば」

○もり山

雨もいたくもる山はト葉のこらす色づきにけり

○篠原や

地名の篠原を、篠

の生いたる原に

○鏡の山

古今集雜の部に「鏡山いさ立ち寄りく見

○物を

思へば云々

心に憂あれば、年老ゆき古來いひ傳へたるよりいふ

○老蘇の森 夜の雨にも老いさ老蘇をかけたたり

○不

破の關屋

伊勢の鈴鹿、越前愛發、アヲチと共三關の一なり

○尙もる

なほ守るを雨の漏るにいひかけたり

○わが

身の尾張

我身の終りさ、美濃尾張をかけたたり

○八劍

熱田神宮は八劍殿あつて、元明天皇の御代に造れる寶劍八口を祀れり

○鳴海瀉

潮干になるさ、地名をかけたたり。新古今集に「小夜千鳥聲こそ近くなるみ瀉かたむく月にしほやみつらん」とあり

○遠江

遠きこ、國名遠

○捨小舟

のる人もなく捨てられたる舟。たよりなき舟。我身の江をかけたたり

○夕暮

云ふさ、夕暮

○入相

夕方つ

○重衡中將

平清盛の子。一の谷の戦に生田の森

を守り、敗れて捕へられ鎌倉に送る ○東夷 武士をいやしみていふ ○燈火幽にして 夜の
 さまをいふ ○匹馬の馬 ○嘶えて きていなな ○家郷 故郷に ○命
 なりけり 新古今集に「年たけてまた越ゆべしと思ひをいふ。後轉じて一般に辨當のこまにいへり」
 ○轅 輿の前後に長く出 院宣 勅旨 南陽
 縣菊水 支那にて、飲めば命 古もの歌 菊川にて誅せられし人の事を聞
 じくして、こゝまで來りし事なれば、やはりにありし名は、大井川は京都にもあれ
 ○龜山殿 京都大堰川に 龍頭 龍首の舟 天皇の御座船。二隻にて一對をな
 龍はよく水を涉り、鶴はよく風に堪ふる故なりとぞ ○眞葛裏枯れて 眞葛は葛を
 葛の葉の裏の 關守 關の番人 ○田子 田を耕す農夫を、田 ○うき世を

遠る車返し 一榮一落の世の有様を、道中をあらちちへめぐる事にいひかけ、尙經め
 郡沼津町の東北 三橋邊をいふ ○竹の下 駿東郡足柄村 ○袖にも波はこゆるさのゆ
 るぎは相模國中郡大磯町の小字なり。其海岸は、古、小餘綾 (コユロギ)の磯さいへり、波の越ゆるさ地名をかけたなり ○いそぐ 急ぐことを
 たり

一九 夏の歌

短

歌

○さりげなく 其の様子 ○心あて 推し測りた ○わぶる もたゆる

二〇 京都の山水と平安朝

○世界の樂土 世界に於ける尤も樂しき地 ○東亞の伊太利 東方に亞細亞に於ける伊太利
 國を之に比 〇エキス 粹を集めたる意 ○雄大豪壯 盛んに大きくし ○嘩

麗い 美しくはなや
かなること

○幽婉いゆうわん 世をはなれて、は
やかなること

○四明しみやうが嶽たけ山やま 比叡

○香山かやま

○子の日の遊あそびで、古こ、正月の子の日に、人々野邊に出
小松を採りて千代を祝へること

○大堰おほい 一に大井

○激げき

湍たん 水勢はげしき流れ

○沈々ちんけん 水の深きさ
まの形容

○茫洋ぼうやう 大なるさま

○跌宕てつたう 勢の盛ん
なるさま

○句配かうはい の度合かたむき

○塵埃ちんあい

○山紫水明さんしすずめい 景色のうるはし
きを稱する語

○濕潤しつじゆん 水氣のため、物のうる
ほひてつやつやしきこと

○朝あさ

な夕ゆふな 晩朝

二 京都の山水と平安朝

その二

○凛々りんりん 鋭き感じの身
にしむさま

○烈日れつじつ 夏の燦はげが
如き日光

○和煦わく 正しくは「ワキヤウ」と訓
す。暖く、日和よきこと

○峻酷しゆんこく 過度にきびしくし
て、容赦なきこと

○風物ふうぶつ 季節の
ながめ

○浦曲うらび 浦の風曲
したる處

○松曳まつひ

く 前の子の日
の遊を見よ

○花橘はなたちばな 花の咲
ける橘

○公事くじ 朝廷にて行
はる儀式

○物詣ものまうで 神佛の
参詣

○途絶とたえがち 中途でや
すみがち

○名越なごしの祓はらひ 陰曆六月三十日に
行はれたる大祓

○千入ちしほ 幾度も
染むる

○涵養かんやう 第に養ひなすこと

○薰育くんいく 徳を以て、人をよ
き方に導くこと

○歌合うたあはせ 歌
を

よむもの左右に分り、判人を立て、歌
のよしあしを評して勝負を定むること

○白馬あをうまの節會せちあひ 古昔、正月七日、左右の
馬寮より、二十一匹の白

馬を庭中に引き出し、天
皇の御覽に供せし儀式

○曲水まがみづの宴えん 古昔、禁中に於て、三月三日の桃の節句に
行はれたる公事、御前にて酒を賜はり、詩

歌を作り
しこと

○薬玉くすりたま 種々の香料を入れたる袋を集めて玉となし、造花等を以て之を飾
り、其下に五色の糸を七八尺程さげたるもの。古、之れを簾又は

柱はしらなどにかけて、不浄をばら
し、臭氣を防ぐ具とせしもの

○銀河ぎんが 天の
川

○惆悵せうたう 失意の
さま

○憧憬せうけい も

ひあまりて、心
の落着かぬさま

○映發えいぱつ 互にうつり
あふこと

○吟哦ぎんが 詩歌を吟
ずること

○烏兔うと 匆々

歳月の経過の早きをいふ。鳥は金
鳥にて日、兎は玉兔にて月をいふ

三 歌文の才

【二月張の月】

○延喜の御時 醍醐天皇

○御書所 古昔、皇室の御藏書を保管せし役所

○しのびね 四月頃の時鳥の初音をいふ

○つかうまつる つかへまつるの音

○こと

なつ 他年

○このよひばかりあらじ 此よひ程よき

○みはし 階御

○おほうちぎ 大程。あこめの、ゆきたけを大きくしたてたるもの

○ありる 下に在る

○勅祿

天皇のかつけもの

【三大井川の三船】

○ひととせ 年 或る

○作文 當時の作文をいふ

○た

へなる人 巧妙なる人

○をぐら山の歌 小倉山へ紅葉を見にゆけば、吹く風は寒しき、紅葉の人毎にちりか

○かばかり 歌に匹敵する程の

○心ちごり 意得

三三 国歌評釋

武島羽衣

○糺糊 せめさま

○たむだく 手にて抱く義。手なくむ

○景致 おもむき

○靈

腕 尤もすぐれたるうでまへ

○胡録 矢を盛りて、背におふもの

○貔貅 共に猛獸の名。轉じて兵士のつよさに比していふ

○口吻 うちぶり。くちばし

○名什 すぐれたる詩歌

二四 明治の一瞥 (二) 經過一覽

○波瀾 ざわ

○勵聲疾呼 聲をあげまして、口早くさげぶこと

○會心 心になふこと。思ひのまゝなること

○燥急 心あわたり

○暗殺 うち

○經綸 國家をなさめこと

○兵略 軍事

上の智略

○血税 國民の兵役義務

○一揆 土民の蜂起して、あたりを抄掠するもの

○武斷派 武力を以て事

を決する黨派

○印綬を解く

官を辭すること。印綬は、支那にて官印を帶ぶるくみひも也

○俚歌 俗歌

- 鼓舞 ふるひおこすこと
- 搖籃 物事の發展のいきぐち
- 翕然 一つに合ふさま
- 耽讀 読みふけること
- 矯激 強ひて普通と異なる舉動をなすこと
- 縲紲の厄 なほめのわざはひ
- 遊説 四方を説きまわること
- 刺客 或る目的を以て、顯要の地に在る人を刺し殺さんとするもの
- 無頼の徒 一定の職業なく、性行不法なるもの
- 長足の進歩 進歩の速きこと
- 粗笨 そぼん、そまつ。あらあらしくして、つたなきこと
- 趨向 むき
- 長足の進歩 進歩の速きこと
- 支離滅裂 はなれぐになりて、筋道が少しくなりぬこと
- 駢辭 あつたあつたこと
- 混沌 物事の判然せざるさま
- 萎靡 よわりちみみて、勢のなくなること
- 功利の思想 功名と利慾とのかんがへ
- 瀾漫 はびこるさま
- 警鐘 めいましめのたゞしき鐘
- 覺醒 よびさま
- 繚亂 れうらん、ちりちり
- 彬々 ひんびん、文物の盛んなるさま
- 貢獻 力を致すこと

二五 上島鬼貫

- 膾炙 くわいしや、なますさあぶりにくこと。人の口のはにかゝるをいふ
- 雅俗 がせく、風流と俗なること
- 飄逸 へういつ、飄然として世外に身をたづねること
- 澹蕩 たんたう、あつさりさること
- 雋味 しゆんみ、すぐれたるあぢはひ
- 連俳 れんはい、連歌と俳諧とをいふ
- 口ずさむ 口の中に何もなくいふ
- 檀林 たんりん、俳句の一派。正風の對にして、措辭多く滑稽なるもの
- 詞藻 しそ、詩文に用ゐる華やかなるもの
- 沈澁 ちんせん、ひそみか、くくれる
- 汲々 きふく、一心を傾けてつぎむるさま
- 蟬脫 せんだつ、外形は其儘にして、内容のわけ出づること
- 新旗幟 しんきし、新しきはたやのぼり。一流を立つること
- 符契を合す ふけい、わりふを合せる。甚だよく合するをいふ
- 連歌 れんか、和歌の上下二句を二人にてよむもの

二六 俳句

- 夜もすがら よもすがら、一晩中よむこと
- なくもがな なくもがな、なくてほしい。無くてありがたい
- 蕭條 せうてう、さびしきさま

二七 百 蟲 譜

横 井 也 有

○莊周が夢を夢みたるをいふ

○託しけめのであらう

○古今をいふ

○古池に飛んで

芭蕉の句に「古池や蛙さびこむ水の音」

○翁人にして俳諧の中興たり

○五

月晴れ五月雨の晴

○やがて死ぬけしきは見えす

蟬は命短き者の由、徒然草などに書けるを、其聲

のいさましきを聞きてよめる也

○景物 景色をそ

○すたくまる

○貧の學者にと

られて 車胤の螢を集めたる故事をいふ

○蜀魂 蜀の異名

○槐安の都 槐安國の都。淳于髡が夢に見た

の異名

○促織

○むくつけし

○一在所村

○卯月 陰曆四月

○端居珍しき夕

條則などの端近く居ることの珍らしき初夏の夕ぐれ

○長月 陰曆九月の異名

○蚊

やり 蚊を追ふため

○風雅 風流。みやび

二八 秋 の 月

自 然 の 妙 趣

○金風 秋風

○菽米 菽は豆なり

○穰々 穀物のよくみのりたるさま

○皎々 月光の白く見

えわたるさま

○清朗 清くさわわ

○羈旅 びた

○ふりさけ見る 仰ぎて見る

○輶軒不遇 志を得ずして、不

○心にもあらで

○痛恨 萬事思ふ様にならず、不平にて

甚しくうらむること

○權資 高位高官に昇りて、權威高きこと

○望月の 十五夜のまん丸なる月の如くの意なり

○素因

○主觀的 其のものの自身にかけ観察すること

二九 述 懐

本 居 宣 長

○昨日は今日の昔 歳月の早く過ぎ行くことをいふ

○はかなく

○わが世 己れの生涯

○三十

○生けらん 生きてあ

○世ごもる

○何すと

しもなく 何事もなく ○苦の下に朽ち果てなん 死して其名の聞えざること ○い
 ふかひなし 効能なし ○いたり 造 ○世の人にも數まへられ 一人
 人として 數へられ ○えうなきものにはふらかし果つて 無用ものさし ○一つゆ
 るづけて 身に一つの藝能をつけて ○なのめにしいづるふし どうかかうか、人なみに出来ること
 ○あいなだのみ たのみにならぬたのみ

訂補 新體國語教本詳解 卷九終

訂補 新體國語教本詳解 卷十

一 御國ゆづり

○さがなき御ふるまひ さがなれば、善くなきこと。悪しき御舉動 ○須賀 大原郡海潮村大字諏訪の御室山は、その
 舊址なり さ云傳ふ ○生太刀 生きたる太刀の如く鋭きをいふ ○撥ひ あをひとぐさ ○青人草 人民のこと。人の年々生れ出づ
 るを草の生え茂れるにたさへていふ ○建御雷命 たけみかづちのかみ ○伊那佐の小濱 銚川郡杵築の海濱の舊名 ○十
 握劍 古代にあつては、握りたる四本の指の長さを以て、長さをはかる單位とせり、されば十にぎりの長さのつるぎといふ ○答へまつ
 らく こたへまつるやう ○吾はとかく申さじ 自己一身にては御答へ申されず ○白す ○鳥
 の遊 あそび 狩りて遊ぶこと ○三穂の崎 八束郡美保關村の東 ○獻り ○すらへ返答。

事する
 ○千曳石 千人にて引
 ○撃げ
 ○忍びく
 ○諏訪
 の湖 諏訪郡
 ○まにまに 仰の
 ○宮居 神の宮のある
 ○底つ岩根
 に宮柱太知り 地のそのいほの上、宮城の柱
 ○氷木高知り 上古の家作
 むれのはじのきを棟の角より
 ○百八十神 多数の神
 ○杵築の濱 今の出雲
 組み合せて突出したるもの
 ○御舍殿 世に名
 ○いつさしづめつる
 也
 ○神集へに集へ 神謀に謀り 諸神が會合なされて、
 御相談なされるをいふ
 ○皇孫命
 ○天の磐座 高天原の高御座のこと。磐は、
 堅き義にして、美稱なり
 ○天の八重雲 天上の幾重も
 ○天つ日嗣のいやつぎくに 天皇の御位がい
 よく繼續して

二 君が御蔭

短

歌

○筑波嶺 常陸の
 ○このもかのも
 ○君が御蔭 君が御仁
 ○けふよりはの歌 今日より出征する我は、家を先づ家と妻子を忘れて、之れを
 願みず、唯大君の醜の御さなりてゆくことなり。しこ醜は己れ
 を卑下して
 ○今奉部與會布 勅命によりてこそ此の身
 を用ひたり。ものふのは。ヤそうちがはの矢にかゝる枕詞なれどもこゝにては意味重し

三 元祿時代

○二俣名 外見をか
 ○伊達 ざること
 ○はかなき噂 一すした
 ○豪放 男氣
 て、おほま 寛闊 心のひろ
 ○町奴 だて
 ○刑戮 とき
 ○男
 伊達 義 鎌髭事々しき 鎌の如き太ひげの
 ○かたはら痛し 傍にあり
 毒

に思はるること ○誇りか 自慢
 〇侍風情 風情は、其種類の者共の意に
 〇分限者 有福なる人。大福長者
 〇眷顧 ながさげ
 〇神品 最もすぐれたるもの
 〇蠢かす
 〇連歌 和歌の上下句を二人にてよむもの
 〇あら事 芝居にて、役者が勇者に紛して行ふしわざ
 〇綺羅 絹の衣

四 芭蕉と蕪村

〇風流三昧 風流に思ひた専らにするとき、又其書を讀みて私かに己れの身をよくすること
 〇風格 美しく、かたがた
 〇私淑 其人を慕へども門に及ぶ
 〇落 打ちさけて、さ
 〇軒軽 軽重、差等の意。軒は車の後に却き回るなり、軽は車へばりせるさま
 〇前より見れば軒の如く、後より見れば軽の如し。故に輕重
 〇膚淺 極めてあさはかなること
 〇掃蕩 掃は埃塵を去ると蕩は汚水を行ること

去るをいふ
 〇颯起 起ることに
 〇驍將 武勇ある大將
 〇畫技 画をかくこと
 〇發揮 あらはし出す
 〇靜寂 さびしきこと
 〇客觀的態度 直接ならずして、第三者の地位を以て事を見る態度

五 わが國の繪畫

〇理性 ものごとの純粹の理を判斷する性
 〇銜 つけ
 〇印象 物の面に印したるあきかた
 〇實相 實際のありさま
 〇濃艶 濃く艶やか
 〇瀟洒 さまさま
 〇輪奐 建築物の廣大なること
 〇高士 志高く節を守りて流俗に媚びぬ人
 〇彫塑 彫刻、造像
 〇巨勢金岡 巨勢家の祖。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に
 〇丹青 繪畫のたより
 〇廢墟 荒れたるあきかた
 〇障幡 寺院に下げたる幡
 〇轉讀 字句を追ひて經文を讀みゆくこと
 〇龍頭の舟 舟のへさきに龍の頭の形をつけたるもの
 〇嘶伽 迦陵嚩

極樂浄土に棲み、面美人の如く、音聲極めて幽好なりさいふ想像の鳥

○彩華炫耀 照り輝く美しき色の

○闡く

○洒

脱 俗臭なきこと

○逸品 すぐれたるもの

○提撕 後輩の者を指導すること

○香茶

湯の

○禪刹の寺

○結跏 兩足を方ちかひにし

○破墨一掃 墨をふくませ、勢よくかくこと

○光琳 尾形氏、名は方

○大雅 名は無

○一蝶 英一蝶をいふ。大阪の人

○菱川師宣 安房の人。支竹と號す。正徳年中歿せり

○氣韻生動 勢の

○文人畫 筆意を旨として、風雅を尙ぶ疎畫にして、多く墨繪なるもの

○氣韻生動 勢の

○應舉 圓山氏。丹波の人。京都に住せり

○訥言 田中氏、名は痴。京都

○容

齋 菊地氏、名は武保。多南朝忠孝の士を尙く

○崛起 にはかに起りたつこと

六 明治の一瞥 (三) 洋風扶植と國粹保存

○固陋 なたくせ

○宇内 天下

○桃源洞裡 仙境

○國是 一國の政治の方針

○洋風扶植 歐米の文物を我國に

○木鐸 鐸は鈴にして、木鐸さば金口木舌の鈴を

○世界國盡 福澤先生が、世界の歴史、地理を教へんがために爲したるもの。全體七五調なり

○啓發 智能のひらき導くこと

○西國

○西洋事情 西洋の文物政治の美を説き、到底我國の企及し難きを記したり

○啓發 智能のひらき導くこと

○西國

○立志編 蘇國人スマイルス(Smiles)の自助論(Self Help)の翻譯にして、明治三年の發刊也

○喧傳 いひはやす

○明

六社 明治六年に創立せしを以て

○朝野 朝廷、民間

○碩學 大學者

○淵叢

淵は魚の集まる所、叢は虫の集まる所

○非運 運命の開け

○變則 不完全なる辭書につきて、發音も極めて不正格にして、釋義も漢文の反り點の如く迂遠なるもの

○正則 直接西洋人就きて、發音文法共に正しき方法を以て學ぶをいふ

○一知半解

物事につきて、試る所の極めて淺薄なること
○素養 ちした 明治二十二年十月發刊。文學専門の雜誌
なり。後「めざまし草」
○改題せしが廢刊せり
○鹿鳴館 魏町區内幸町に在り。今華族會館となれり。
○列強の強國 鹿鳴館 今華族會館となれり。
○史乘 史 歴 幕政に同し
○黃梁一炊 盧生の夢
○史海 發刊す。東西歴史を研究し、一時大
○參酌 かり 天にはびこる勢。勢
○滔天の勢 天にはびこる勢。勢
○日本文學全書 直文
刊。國粹保存を標榜す。井上圓了、
三宅雪嶺、志賀重昂等主唱す。 にほんぶんがくぜんしよ
小中村義象、萩野由之の三氏により、
二十三年、博文館より出版せらるる。 にほんぶんがくぜんしよ
○史海 發刊す。東西歴史を研究し、一時大
○研鑽 深く事物の理をみ

七

西洋文藝復興と明治の盛代

坪内雄藏

○武力これ正義の暗黒時代 戦争を以て正義とする、文物道徳の墮落腐敗せる時代

がききはむること

○科學 原因結果の理法によりて、系統的に論述證明せる學問

○産聲を揚ぐる 生まれ生ずるをいふ

○新思想、新現象 新しきかんかへ、新しきありさま

○羅針盤 石 磁

○ダイヤズ 航海家の

○マゼランは 葡萄牙の航海家にして、マゼラン海峡の發見者

○精神界 心のうち

○享樂 のしむた

○物質的の上

○ユペルニカス

波蘭の星學者。その著、天體循行論は近世星學者の基礎なり

○地

○動説 地球の廻轉説

○謬蒙 ちやうちやうのあやまりひ

○厭世悲觀 世を厭ひ、總て社會の成立に不満足なること

○烹熟 こと

○大刷新 弊害をのぞいて、一新にすること

○進化論 世界の生物は其原始にさかのぼって見れば、皆一つ種類のもの、それが各方面に發達したるものなりとの論

○湊盪 うごく

○空前 以前に夫れに比すべきものなきこと

○海嘯 みつな

○劣 平凡にお

○悲運 かなしき運命

○奮迅 けしきさまたげしきさま

○庸

八 我が國の使命

○扶桑 東海中に在る神本なりといふ。この事、東方朔の十州三島記に出づ。支那人の日本國を指して扶桑といふはこれに基す。桃源の夢 桃源に入りたる夢。轉じてこの世離れたる夢。桃源は、那の武陵の桃源さて、俗界を離れたる仙境なり。

○普天 天の地上を覆ふかぎり

九 白峯の陵

曲亭馬琴

○白峯の陵 讚岐國綾歌郡松山村字青海にある高峰。山上に白峰寺あり。崇徳天皇の御陵は、此寺の西北に在り。かごとがま

○爲朝 爲義の第八子。御墓 白峯の御陵。千草は一叢の煙

を殘して 秋の千草滿山に生ひ茂り、院が生前玉殿に燈させ給ひし燈火の跡方もなく、唯其形見と覺ゆるは、牧童撫夫が一叢の枯草を集めて焼き残せりと覺ゆる煙

ばかりなり。○五更 今の午前四時にして、寅の時さもいふ。白楊 はこや

○良 玉垣の垣 踏躑 十善萬乘の聖主 佛教にて

天子は前世十の善行なりし果報によりて生れたりといふに依り、又萬乘は、孟子の註に「天子畿内、地方千里、出車萬乘」とあり。戦時に兵車萬乗を出す故なり。

○北 關の月 宮中の月。北關は、天子の宮殿の北方の正門をいふ。懷土望郷 やなして書けるなり。

○佛 佛教にて修する儀。同向修養の儀式。強顔 かりける。大島 伊豆の大島なり。

一〇 光頼參内

平治物語

○同十九日 此日。信賴朝反して、夜三條殿を襲ひ、宮を焼き、後白河上皇及び二條帝を遷し、十九日信賴遂に信西を殺す、同十九日とは此十九日を指す。

○公卿僉議 公卿大勢集りて評議すること。勸修寺左衛門督光頼 勸修寺は其の家名、左衛門督は其の官名

なり。藤原氏にして、常時年三十六。○信頼 藤原忠隆の子。過分 身分不

太刀 儀式の時に用ふる太刀。○ちとなしやか 腹卷 巻きて背にて合せる

やうにし
 たるもの ○雑色 藏人所に属して、
 雑役に供する者 ○自然の事の事 萬一
 ○先高らかに
 追はす 聲高く先拂
 ○弓をひらめ 弓を
 伏せ ○矢をそばむ 矢をかたは
 らに向ける
 ○殿上の上 清涼殿
 ○一座す 第一の席
 ○ト臈たち 上の位に進
 める人々 ○宰
 相 一名 参議の
 ○長方 時に年
 ○よにしごけなう見え候へ 實に秩序をみだ
 らせて見えまする
 ○色代 さつ
 ○むすど 勢ひはげ
 しきさま
 ○母方の舅 信昭卿の母は
 光頼の妹なり ○大力
 の剛の人 く膽力ある人
 ○居懸けられて すわら
 ○下襲 の下に着る衣
 ○裾引き直し なほし
 ○衣紋 つくろひ 衣の襟の合せ
 ○笏 け
 ○氣
 色して 面を正し、
 勢を見せて ○御誼ぞ 仰か
 ○突い立ちて 其まゝ一寸
 立つて ○惡
 しう参つて候ひけり わるい處へまわりまして、さんだ
 相談のおさまたげをいたしました
 ○兵ごも
 ○あ

はれ 天晴 あつげれ。
 ○大剛の人 甚だすぐれた
 剛氣の人 ○出任 出勤。出でて
 仕ふること ○頼
 光 源満仲の長子にして、英武
 驍勇一世に冠たりし人なり ○頼信 頼光の弟にて、驍
 勇を以て聞えたり ○なご 何故
 ○壁に耳、天に口 壁に耳ありて聞き天に口ありてものいふ如く、人
 ○小葎 小葎。殿上の六間に在りて、
 主上の殿上を御覽せらるゝところ ○見参の板 御殿南戸の外板敷一枚を釘うたす
 して、鳴板また見参の板といふ
 ○荒海の障子 清涼殿の廣びさしの北にたておかれたる布
 ○萩の戸 清涼殿夜
 北にありて、二
 ○惟方 光頼の弟にて、信頼の母
 間に一間なり。時に年三十五 ○有職 廣く學問見識あ
 る人(ものしり)
 ○車の尻 牛車の後。二人乗るこ
 ○少納言入道 藤原信西
 ○神樂岡 山
 國愛宕郡
 ○以ての外 思ひ
 ○先蹤 のためし
 ○穩便ならず やか
 だ
 ○天氣にて候ひしかば 天皇の御意なれば、下に「是非に
 及びがたし」を補ひて解くべし ○勅誼

天皇の
おほせ ○一議申さざるべき 一度申上げて 辭退申さぬ ○曩祖 祖先 ○三條右大臣
臣 高藤の子 定方也 ○延喜の聖代 醍醐天皇の御代 ○徳政 仁政。めぐる政。みある政治 ○英雄 量
すぐれたる人。 英雄家の略なり ○有道の臣 人臣たる正道を守る良臣 ○讒佞の輩 へつらひも
○與せざりしならぬ ○さしもごかる、 他の人より非難される。 ○御
邊 貴 累家の佳名 家代々のか 人ばしき名 ○時刻をや廻らすべき 時を移す。さ
か、否決して左 安穩 事無 ○灰燼の地 火にもえて形な くなりたる地 ○朝家 皇室
様にはまるらず ○相構へて 相互に準 備して ○主上 二條天皇を 申し奉る ○上皇 後白河上 皇を申す ○内
侍所 禁中温明殿の別稱にして、神鏡を安置せること。 女官内侍が常に齋き祀るによつてかく申す ○温明殿 夜御
殿 天皇の御寢所。清 涼殿の中に在り ○朝餉の方 清涼殿の中に在りて、天皇の 朝の食事を聞き召すこと。 ○櫛形の

穴 清涼設の中に在る櫛 形の如き窓の穴 ○かげろふ 影がもの、すき よりうつること ○王法 佛法より國王
語 ○のろくしげ 兇ふこと。語より出 で、急がはしげの意 ○口説く かへしていふこと。り
○よに冷まじげ 實におもしろ からぬさま ○宿業 過去の 過去の 過去に著る衣
一一 重盛練言 その一 平家 物語
○黒絲絨の腹巻 黒い絲を以て、縋の札 をおとしたるはらまき ○白金物打ちたる胸板せめ 腹
の腹板に、銀の金物を打ちたる をひたさ身に狹めて著たるなり ○ひるまき 長刀の柄又は鞭、刀劍の柄鞘などを
たるを ○ゆししく 勇し ○貞能 家貞の子。後剃髪して、 世に肥後入道と稱す ○木蘭地 木蘭の地
黄赤にして、黒色を 帯びたる色をいふ ○緋絨の鎧 赤糸を以て札を 赤糸を以て札を ○平右馬助 清盛の叔父
○一の宮の御事云々 忠盛が重仁親王のよりやくにして、 清盛は所謂めの子なるをいふ ○御遺誠 死にぎ

ひのこし
たる戒め

○院内 院さ内さなり。院は後白河上皇を申す。内は二條天皇を申し奉る

○隨分 今の語よりは意強くして

自分相應の力を
つくしての意

○經宗 後に左大臣に至る

○七代までは思召し捨てさせ給ふ

べき よし多少の罪過があつても、子孫七代に及ぶまで位は御ゆるしがあつてよろしいと思はれる

○西光 名は師光、藤原氏、無

道人 正當なる人

○御結構 見目論

○院宣 上皇の教旨

○北面 北面の武士。院の御所侍衛

官の武

○させなが 大將の著る通

○小松殿の重盛

○たんな たりなの音便さ見

しるべ

○法住寺殿 京都市下京區町三十三間堂の東に在りき

○これへまれ 此れへ

○禪

門 佛門に入

○物狂はしき きちがひ

○卿相 雲客 師相は三大臣中納言、雲客は四位五位の官人

○受領 守國

○衛府 近衛府、兵衛府、衛門府

○縁に居てぼる へんいつばいなるをいふ

○引さそばめ せむたよ

○馬の腹帯

○大紋の指貫 大紋は布製の直垂にして、大形の家紋を

五所にあらはして、下には長袴を用ふ。指貫は袴の一種にして、襷を縁に指貫きてふくらせくゝる

○そば取つて ばした

○さ

やめさ 音すること

○ふしめ 目

○五戒 不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒

○おもはゆう さまま

○素絹の衣 僧などの著る白色の生糸にて造れる衣

○金物 かなもの

一二 重盛練言 その二

○舍弟 自分の家の弟

○現とも覺えず候ふ 現實と思はれません

○普天の下 天の地を覆ふ

○率土の濱 河海の接する陸地のかざり

○蓮府槐門の位 大臣の邸をいふ。蓮府は齊の王儉の故事に出

で、槐門は周の代、三槐を朝廷に植ゑ、三公之れに面し座せしに本づく

○田園 やう

○進止 するが

かみのみ

○非禮 禮にはづれたること。禮記の「神不享非禮」より出づ

○傍若無人 人をもはげば

○哀憐 れあは

○敍爵 爵位に敍せ

○千顆萬顆の玉 千萬個の玉

○一

やめさ 音すること

○ふしめ 目

○五戒 不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒

○おもはゆう さまま

○素絹の衣 僧などの著る白色の生糸にて造れる衣

○金物 かなもの

一二 重盛練言 その二

○舍弟 自分の家の弟

○現とも覺えず候ふ 現實と思はれません

○普天の下 天の地を覆ふ

○率土の濱 河海の接する陸地のかざり

○蓮府槐門の位 大臣の邸をいふ。蓮府は齊の王儉の故事に出

で、槐門は周の代、三槐を朝廷に植ゑ、三公之れに面し座せしに本づく

○田園 やう

○進止 するが

かみのみ

○非禮 禮にはづれたること。禮記の「神不享非禮」より出づ

○傍若無人 人をもはげば

○哀憐 れあは

○敍爵 爵位に敍せ

○千顆萬顆の玉 千萬個の玉

○一

入再入の紅 高低千顆萬顆之玉。染枝染波 表裏一入再入之紅。とあるより出づ

○申し受くる所詮 御願申上 院參 院の御所に參 碌位重疊 ちぎ

なりたるが重 ○再び實なる木はその根必ず痛む 今に已に重疊せり。必

○未代に生を受け 生れて来て 果報 因果の應報

一三 滋賀の浦波

○滋賀の浦 近江國大津の地 關東へ送致せらるゝを聞召

○上上主 安からずおぼす 元弘元年五月、俊基等

北條時益、北條仲時、南北に在りて、京都及び畿内、北條氏追討の事

○かうじ 勘事の音便。勘 當の義にして、

○山の前座主 此の住職を座主といふ

○はやりか

はやるさま。 妙法院の法親王尊澄 妙法院は、今京都下京區妙法院側町に

親王の御 事なり ○衆徒 延曆寺の大衆、 莊園の券契の理非を勘決せし所

決せり ○本殿 清涼殿 〇あてまつる 著るなり。天

ふこさを敬 〇二條院の昔 平治の亂に、二條天皇、後白河上皇御二所共に、信賴

を女房の姿によそほひて、あやしき車に乗せ奉り、 坂本 叡山へ登る坂の本の

藻壁門より漸く忍び出てさせ参らせしを云いふ ○坂本 義より出でたる地名

○あいなし あひなしの音便。甲斐 〇狩の御衣 狩衣のこと。狩は、し、狩獵に

には常服 〇按察 〇萬里小路 〇我にもあらぬさま 確かに我身と

感ぜぬ様に驚き 〇木幡山 山城國宇治郡宇治 〇むくつけし 氣味悪し。

〇木津 山城國相樂郡木津川の邊に在り。 〇東南院 奈良東大寺 〇僧正

聖尊僧正の事。師は關白基忠の子、大僧正たり

○和束の鷲峯山 和束は、山城國相樂郡に在り。鷲峯山は鷲峰山寺の事にして、又金胎寺

○木の丸殿 山より伐り出したるよじにて、削り

○百敷 百石城の約。皇城の堅きを

石に例へたる語にして、大宮の枕詞な

○曹司 官女人、女房などの用部屋。局のこと

○御厨子

櫃を立てたるが如くにて、中に棚あり、舞戸な

○御調度 御道具

○ひす

ましめく女の童 へすまはは樋洗にして、厠の掃除を掌る下司なる女。こも

○め

もあやなり 目もちらつく位なりとの意

○几帳 古昔 座席の側に立て、内外を隔つる爲めに立てたる具

○ふみ

しだく 踏みあらず。蹂躪する

○續松 便。松明のこと

○まかびさして

目の上手に

かざ して 氣疎く。疎ましくの意。轉じて、恐ろしくの意

○さうなく 左右なく。躊躇なしに

○も

てないて してな

○かの兩法親王 大塔宮尊雲。妙法院尊澄兩法親王なり

○卵の花おど

し 卵の花の白く、葉萌黄なるにかたごりて織すなり

○たてまつりて 兜をかぶるなり

○大矢 普通の矢

二束を法さす。されば其以上の長く大なるをいふ

○生絹の御衣 生絲の練らぬものを織りたる絹布の名

○萌黄の御

腹巻 萌黄絲にて織したる腹巻

○からの香染の薄物 からの香は支那より渡れる義。香染は染色の名にして、淡紅に黄を帯びた

るものなり。薄物は羅にて、紗の類の總稱なり

○掲焉 著しく

○海東とかやいふ兵 大將

にして、此時 討死せしなり

○とりあつめ心ぼそし 有明の月、浪の音、松風など、まぐさり集めて、愈心細しの義

一四 對坐

徒然草

○さしたる事なくて 用事もなくて

○人のがり 人の家

○いとむ

つかし 甚だ解しがたい、面倒なり、煩しの義

○いとほしげにいはんもわろし 客が無益の永物詰する

さて、いさほしげに不請の答せんもわろし

○心づらなきこと云々 己れに用事ありて、永ばなしの心におちつかぬ時には、けふは

用事あれば歸り給へなごさいはんなれども、之れ程の急用もなき徒然の身は、詮方なくあしらひて、身もくたびれ、迷惑なりとなり
趣味を同
○ 阮籍 竹林七賢
人一人

○ 同じ心に

一五 酒 狂

徒 然 草

○ ともある毎に 朋友のたづね来る度に
○ 人めをはかりて 他人の注目するを考へ避けて
○ す

ずるに 同様に
○ うるはしき人 容儀端正なる人
○ 息災 災息むの意にて、壯健なるをいふ

○ 祝ふべき日 節句、嫁娶、元服日などないふ
○ よひふす 呻吟(うめき)して臥する
○ 生を隔つ

生命をへだつる義。生活の相間隔するをいふ
○ ひとの國 異國を指していふ
○ 思ひ入

注意深
○ 心にくしと見し人 我が信仰せる人
○ 紐はづす 裝束の紐

容儀の亂るさま
○ すぢる 身を曲げられる。行儀の正體ならざるを形容していふ
○ わが身いみじ

○ 事ごも 身分の得意
○ 多ひなき 酔ひて泣くこと
○ のりあひ 罵詈、悪口し

なり
○ おし取りて 無理に
○ 物にも乗らぬきは 身分いやしき分際

○ ついち 築地。土
○ えもいはぬ事ごも 云ふにいはれぬ程のこと
○ 百

薬の長 漢書に「鹽食肴之將、酒百薬之長也」あり
○ 憂を忘る 東方朔傳に、忘憂者、無若酒。又文選に「何以忘憂、唯有杜康」

一六 物の見やう

徒 然 草

○ 隈なき 照さぬ處なきをいふ
○ たれこめて 靡などおろしこめて。古今集、藤原國香「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待

ちし櫻もうつろひにけり」
○ 咲きぬべきほどの梢 咲きおほせんとする梢。や、咲くべき梢
○ 歌の詞書

歌をよく聞こえさせん爲に、歌をよくみたる心
○ かたくななる人 無風流の人
○ 青

みたるやう 日暮の月は黄に見え、曉の月は青みて見ゆるさま
○ 椎柴 椎の木、柴の義にて、た
○ 白

檜 柴の檜の木をいふ。大木をいふにあらず

○心あらん友 趣味ある友

○さのみ ほご

一七 冬の歌

短歌

○榎火 榎は火立の意にて、焼く故の名かといふ。薪を削りてたく木の切端をいふ。其火を榎火といふ

○こがらしの風 秋の終り

○たわに しまふ

○佐野のわたり 佐野のあたり。渡にはあらず

○菅の荒野 菅の生えたる荒野

一八 定家と家隆

今物語

○仙洞 上皇の御所

○攝家 攝政關白に任ぜらるべき家門、即ち藤原氏の近衛、九條二條、一條、鷹司の五家にして、之れを五攝家といふ

○強ちに して

○墨紙 墨をふく紙

○申しやりたる方 申上げ

○ま

めやか 實忠

一九 延喜時代の文學

嵯峨天皇の時代

○奠都 都を其地にまためおかること

○紀綱 國家のま

○弘仁時代の時代

○謳

歌 其物を賛して、詩賦等にそれを屬すること

○格調 詩歌の字句の組織又は調子

○軟文學 平易通俗なる文學

○高

邁 高くす

○駢儷體 駢儷は、二字共にナラフを訓す。四六文さて、漢貌六朝の代に行はれたる文章の一體なり

○簡淨 かんじやう

てみじかにして、さつぱりせること

○軌範 本手

○抱負 抱く考へ

○奔放自在 心に

しまりなくして、自由なること

○推敲 詩文等を作るに、種々に文字を工夫すること。古、唐の賈島、曾て「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」といふ句を得

○穩健雅正 穏健がせい、おだやかにしてつよ

始め「僧は推す」させんとし工夫せず、韓愈に計りて敲の可なるを悟れりといふ故事に出づ

○穩健雅正 穏健がせい、おだやかにしてつよ

○尊奉 たふさみい

二〇 小野の御室

○小野の比叡山の西北

○惟喬親王の皇子

○山崎邊にあり、攝津の國

○水無瀬 山崎の附近。斜に男山に對したる佳景の地なり

○右馬頭 馬寮には左右二寮あり。頭は左右各二人にして、

○交野の渚の院 交野は河内國にして淀川の邊にあり。水無瀬の對岸なり。渚の院は、其の水邊なる別墅にして、今尙其名を存す

○上中下 ありさあ 殿に入ることより、寢ることの敬語に用ふ

○大殿ごもり 大殿に

○あかなくに 見あきも

○まだきも 時期より

○雪いと高し 雪の降り積も

○さこえけり 御話申上げ

二羽衣

○風早の云々 風早きこと。風早の三保の浦わを漕ぐ舟の舟人さ

○浦曲 浦曲のあり

○浦人に住む人

○浪路 舟

○浪立ちつゝ 朝霞 波の立ち

○朝霞の立ちつゝ

○およびなき身

○風向ふ雲の云々 浮波立つと見て

○さよ見瀉 清見瀉にキ(來)

○待てしばし して待てに同じ。上文釣せで還るの意を承

○虚空 大空以下の數句は、天人の天

○いかさま なる

○古 人を呼

○人にも見せ 老人は世故にたけたれば、此の衣を見せば其の

○なう びかく

○末世の奇特 人間は今末となりて、天人さばなはだしくかへだてたれば、

○心なき 返す心

○さりとては 賜へに

○心なき 返す心

○下界の身

○なみだの露 涙にかけていへるよ

○玉鬘 玉を緒に貫きて、頭上に

○かざしの花み

○かづらにかけたる也

○かざしの花み

○小野の比叡山の西北

○惟喬親王の皇子

○山崎邊にあり、攝津の國

○水無瀬 山崎の附近。斜に男山に對したる佳景の地なり

○右馬頭 馬寮には左右二寮あり。頭は左右各二人にして、

○交野の渚の院 交野は河内國にして淀川の邊にあり。水無瀬の對岸なり。渚の院は、其の水邊なる別墅にして、今尙其名を存す

○上中下 ありさあ 殿に入ることより、寢ることの敬語に用ふ

○大殿ごもり 大殿に

○あかなくに 見あきも

○まだきも 時期より

○雪いと高し 雪の降り積も

○さこえけり 御話申上げ

二羽衣

○風早の云々 風早きこと。風早の三保の浦わを漕ぐ舟の舟人さ

○浦曲 浦曲のあり

○浦人に住む人

○浪路 舟

○浪立ちつゝ 朝霞 波の立ち

○朝霞の立ちつゝ

○およびなき身

○風向ふ雲の云々 浮波立つと見て

○さよ見瀉 清見瀉にキ(來)

○待てしばし して待てに同じ。上文釣せで還るの意を承

○虚空 大空以下の數句は、天人の天

○いかさま なる

○古 人を呼

○人にも見せ 老人は世故にたけたれば、此の衣を見せば其の

○なう びかく

○末世の奇特 人間は今末となりて、天人さばなはだしくかへだてたれば、

○心なき 返す心

○さりとては 賜へに

○心なき 返す心

○下界の身

○なみだの露 涙にかけていへるよ

○玉鬘 玉を緒に貫きて、頭上に

○かざしの花み

○かづらにかけたる也

○かざしの花み

すに花挿 ○しをくくと 力抜け勢くじけてあ
 せんさするさき、先ず五種の死 にはれなるさまにいふ ○天人の五衰 佛典より出でた
 相を現するを五衰の相といふ 遠く仰い 〇ゆく雲
 上の空に行く 〇迦陵嚩伽 梵語。想像上の鳥の名。極樂淨土に住み、
 よりかかる 〇ふりさけみれば 〇申さ
 うするにて候ふ 申さんさするにて候に 〇人間の御遊のかたみ 我が天
 る形見さして、人間の舞のか 〇月宮 月の世界にありさいふ 〇霓裳羽衣の
 たになる舞を見せんさの意 〇かなで 舞樂を
 〇支那陳の世に製せらる樂名。唐の玄宗が揚 〇東遊
 曲 貴妃を納るる日に此の曲を奏せしといふ 演じ

三三 駿河路

東 関 紀 行

〇清見が關 駿河國庵原郡興津に 〇軍監 副將軍に 〇漁舟の云々 和漢
 昔は關ありしといふ 當る官

集に「漁舟火影寒燒浪、
 驛路鈴聲夜過山」とあり
 頭につけ、之を振り鳴らして驛
 馬を徵發する證となせしなり 〇さむ
 しろ 狭 〇香爐峰の云々 白樂天、晩年、香爐峯山下に新邸を設けて住む。茲
 集に「遺愛寺鐘歌枕聽、
 香爐峯雪撥簾看」とあり 〇臥しわびて 靜かに臥 〇時わかぬ雪 四時雪
 を以て、時候のいつ 〇こよなう 此の上な 〇長さ沼 浮島沼。又、
 さしられぬよしなり 〇雲の波、煙の波 廣きないふ 〇たえく
 かり小舟 蘆間をわけて、 〇蘆
 絶えんさして、
 つらくさま

三三 箱根山

賀 茂 眞 淵

〇ゆくく 〇によふ 〇故郷さふる 支ふ、防
 がら 呻吟するこさ

ぐ、塞ぐなどの義。こゝに
ては、隔てさへざる意なり
すゝる(そゝる)に
同じ)をかけたりに
に驚け
る也 ○とほのみやこ
十の津(舟)の停まる津
遠の都。江戸をいふ。遙に京都を隔て、大都會を
大君の遠きまもりの地たればかくいへり

二四 千蔭を祭る

村 田 春 海

○平春海 姓村田。季後翁と號す。通稱平四
江月の人、文化五年歿す。 墳墓の
大人とは學者を尊びていふ ○ちくつき 古語
なねつき 項根突きの義。額
を地につきてなり ○申さく 申すの延
語なり ○香の木 沈香を
いふ ○う
○十といひて一と
○そのかみ 當時、即
十一の年上なり。このかみは兄といふ
我より年長けたる人をいふ

○峠の宿 舊東海道の宿

○驛のすゞろ 驛路の

○ゆはた 糊縹

○かしこき御勢 徳川將軍の御威

○八

○縣居の庭 縣居は賀茂眞淵の號。庭は家さいふに同じ。後田安宗
御佩。はか
せ給ふ太刀 ○あひうるはしみまつれること 親しく見奉
○みはかし
ら 兄弟 ○おとゝひのつらの列 兄弟 ○世のさがにかゝづらふ 世事に關
係する
○はらか
○疏き方にも過ぎつるを 遠々しくな
りたること ○つかへをしぞく やめる ○世
にありふるわざのまめごとも 世の中にあらゆるまじめな
ること、たはむれごとも ○かたみに
相互 ○常なきは人の身の習 無常の風にさそはる
ること、は人生の常 ○言の葉の道 和歌
の道
○賀茂の翁 賀茂眞淵 ○今をすてて古にかへる 後世の衰へたる風をすて
て、復古の學を唱へたる
こと、を
○心しらひ 心がまへ。 ○賤機のおやあるみやびごと 古代
の織物の名にして、横糸を色どり染めて、亂れたるあやを織り出せる布なりといふ。こゝ
にてはあやさいふにかゝる枕詞におけるなり、あやなるはうるはしく妙なること。みやび

こさは風雅にして卑俗ならざることを云へる也

○古ぶりの歌 古風のうた

御世 藤原は持統文武兩帝の御宇、寧樂は元明天皇より光仁天皇まで七代の間をいふ

○たかきもみじかきも 貴きも

○ここのみの人 物ずきなる人

○こがねの聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬる 千隆の歿したることに、彼れの在世中金の歌文を詠じ出せしも今は早きことあらず

○大方の世の人 世間一般の人

○あまがける 靈魂の天上にのぼることをいふ

○たまあひて よく氣が

○古きしらべ 古風なる歌のすがたをいふ

○相うづなふ 互にうべなふ

○身的面おこし 一身の名譽

○こがねの聲 こがねの聲

○言ひあはする 言葉をとりもつていふこと

○言ひあはする 言葉をとりもつていふこと

○泉の下 黄泉の下、即ちよみぢをいふ

二五 國學者の文章

本將文範序

○阿闍梨 梵語。先生の義。古來、天台、眞言兩宗に於て、高僧の稱號となれり

○仰ごごに袖を拂ひて 光圀が釋萬葉集の稿成りて、元祿十三年二月、安藤爲章をして携へて大阪に下らしめ、更に契沖を聘して伴なひて歸らしめんとせしが、契沖は斷然袖を拂ひてきかず

○そこら 干若

○さしも ほぞ

○えもいはぬ 云ふこと

○論ひ定む 論定

○漢めく 漢學

○えもいはぬ 云ふこと

二七 法律

二六 勸農の詞

○命の親 亡れの命を救ふものの義

○立花 ばいけ

○鮮肉 新しき肉

○雜炊 ざうする

○伽 か

○羅蘭麝 共に香料なり

○論ひ定む 論定

○漢めく 漢學

○冷酷 愛情なく、むごきこと
 ○沙汰 論議
 ○苛察 ぎびしくさ
 ○網罟 なわ
 ○參事官 各省にて、長官の命をうけて、審議、立案等の事を掌る職名
 ○淨寫書 清
 ○審査 しらべさだむること
 ○附箋 がつげ
 ○龜まる かくぎ
 ○閣議 内閣、即ち國務大臣の會議
 ○薄遇 してなしの丁寧ならぬこと
 ○草莽の微臣 草ふかき田舎にすまへるいやしき臣
 ○提出 だしだすこと
 ○辯駁 らいひあ
 ○原案 修正案などに對して、會議に上りたるはじめの議案
 ○逐條審議 一條毎に順を追ひて詳かに議すること
 ○熱罵 ねつば
 ○動議 其場に臨みて、討議に附せんため、一議員より意見を提出すること
 ○可決 合議にて、議案を是認すること
 ○採決 議長が、議案に對する可否を議場に問ひて決定すること
 ○異議 他に異なりたる議を立つること
 ○指名點呼 多人數のものに對して、其の姓名を順次に一々呼び上げること
 ○裁可 天皇が自ら意思を決定して表示したまふ行為
 ○親署 天皇自ら署名
 ○御璽を鈐す 天皇の御命をおしたまふこと
 ○副署 國務大臣が、輔弼の責任を明か

にする爲め、法律又は命令の御名御璽に副へて署名すること
 ○檢舉 犯罪、犯則等の形跡をさりしらしめ、又は其證據を収集すること
 ○公判 刑事被告人を法廷に呼出して、口頭を以て審理する裁判
 ○琴柱に膠する 琴柱を膠にて着くれば、調子の處置の出來ぬことといふ
 ○機微 機運のうつり行くきざし
 二八 臣民の權利義務
 ○逮捕 めしこ
 ○監禁 一室にこもりこめること
 ○審問 しらべ問ふこと
 ○處罰 罰せらるること
 ○許諾 しゆる
 ○信書 信書
 ○安寧秩序 社會の人々が、共同生存に關する條件を守りて、相犯せざること
 ○結社 多人數が共同の目的を達するたために、相合して團體を結ぶこと
 ○抵觸 さしさは
 ○集 集るること
 ○典故 故事
 ○源流 みな
 ○公權 個人が法律上に於ける權利
 ○私權 私人相互の關係を規定する權利
 ○國家が私人に認めたる權利

二九 明治の一瞥

(四) 我が國と列國

○澳門 清國廣東灣の口、香港の西に在り。もと阿馬

○東埔塞

○南蠻

牙人は、東亞の南岸及び南洋諸島を根據地として、東洋貿易を營めるを以て、我國人は彼等を南蠻と呼べり

○矮軀 丈ひくき

○彈

丸黒子 銃砲の玉や、ほくろ。小きき地を喩へいふ

○附庸國

○蹉跌 づま

○兇徒 もの

○隻脚片 徒らに歲月のう

○雞林 もと新羅の別名。今は朝鮮の別名に用ふ

○浪

客人 浪 商 估 人 商 於 特 立 つ

○東瀛 の義

○中華 支那人自ら其國を

誇稱し 敗 衄 大敗。戰敗れて、血まみれになること

○租借 區域を、其承諾を得て一定の期限間、自國の統治

の下におくこと

○モンロー主義

西紀一八二三年、北米合衆國大統領モンローは、歐洲列國の干渉を許さず、又、亞米利加

には、歐洲の紛争に與からずと唱道せるもの之也

○熱中 熱心なること

○創瘡 す

○聯合旗 英國國旗

○唇齒輔車

唇齒と輔車と共に相依り相成するもの。輔は車に載せたる物品を相夾持するもの。車は物を載する

ものなり ○ダビッドはゴライアスに勝てり 西洋の傳説に、古代フィリスチナに巨人あり。ゴライアス(Goliath)といふ。身長十一呎、向ふ所、何人も之に敵する事能はず。ゴライアス其勇に傲り、イスラエル人に戰闘を挑みしかば、此巨人に比して丈ひくかりしダビッド(David) 蹴起して

能く健闘して之を倒せり ○適歸 したかひよるること

○度外視 みておろすこと

○黃禍説

Yellow peril 黄色人種の同

盟して白色人種に禍する義

○恹恹 自ら心には

○壞

空 破滅の義

○坤輿 世界。坤も輿も大地なり

○八紘 八方の網維。こゝにては單に八方といふ程の義

○光

被 光り顯なり、被ば及なり。功德顯現、遠方に及ぶ義

明治四十五年六月卅日印刷
明治四十五年七月八日發行

補訂 新體國語教本詳解 卷十終

壯士

大伴家持

ますらをば名をし立つべし後の世に

きつぐ人も語りつぐがれ

正價金四十錢

發行者 木田吉太郎
東京市日本橋區數寄屋町六番地

編纂者 高梨晚霞

發行所

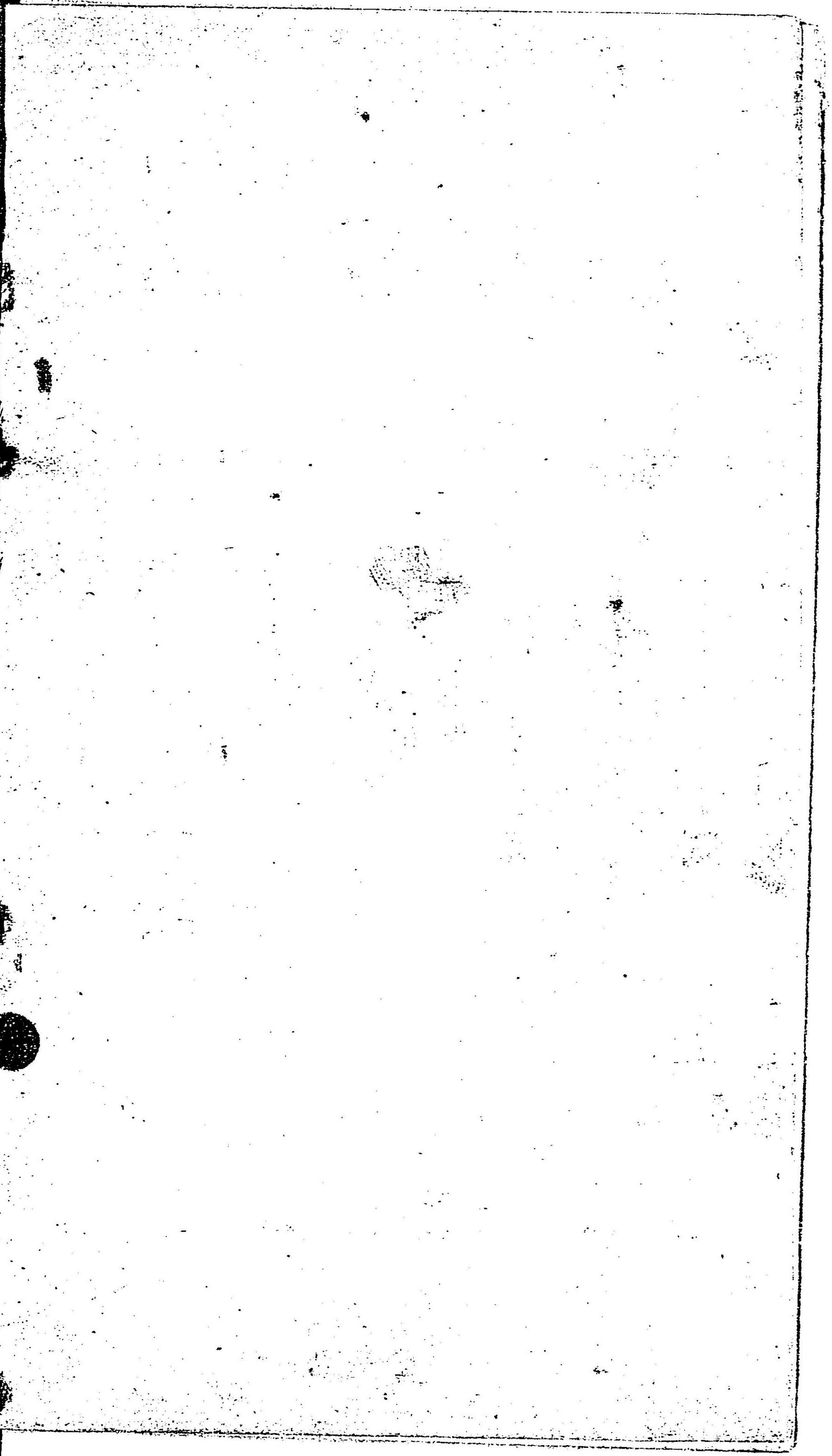
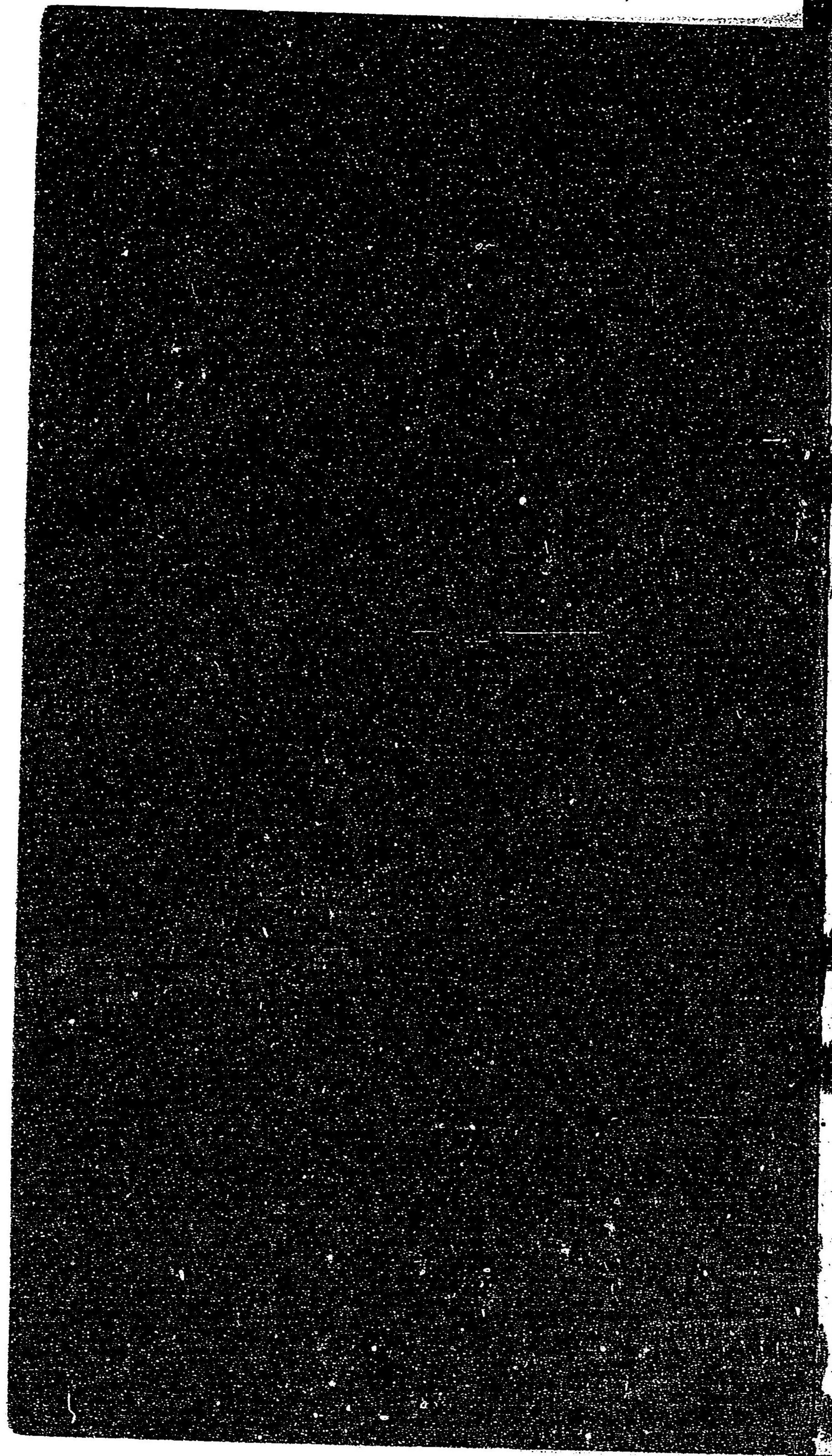
東京市日本橋區
數寄屋町六番地

集文館

電話本局三、三二二
振替東京一三九八三

許不

印刷者 森潤 二
印刷所 東京市京橋區南水谷町七番地
日進舎 東京市京橋區南水谷町七番地



5
112



館 文 集
行 發

